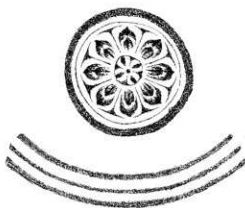


宮城県仙台市

郡山遺跡 44

—— 令和5年度発掘調査概報
郡山遺跡・陸奥国分寺跡 ——



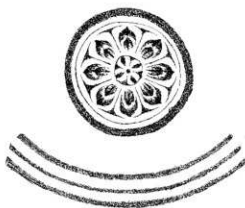
2024.3

仙台市教育委員会

宮城県仙台市

郡山遺跡 44

—— 令和5年度発掘調査概報
郡山遺跡・陸奥国分寺跡 ——



2024.3

仙台市教育委員会

序 文

日頃より仙台市の文化財行政に対しご理解、ご協力をいただき感謝申し上げます。市内には数多くの遺跡が確認されており、遺跡に眠る埋蔵文化財はその時代に住んでいた人々の痕跡を伝えるものです。当委員会としましては皆様のご理解とご協力を得て、大切な文化財を保存し、後世に伝え、また活用を図り、その価値を生かしていく所存です。

本報告書には、今年度を実施した郡山遺跡、陸奥国分寺跡の発掘調査の成果を収録しています。

郡山遺跡は、地方官衙としてはわが国でも最古段階の重要な遺跡です。郡山遺跡の発掘調査事業は、幻の城柵としての一端をあらわした昭和54年の最初の調査から45年目を迎えました。その後継続的に実施してきた発掘調査により、古代の文献に記録のない“幻の城柵”はまさに“甦る城柵”として私たちの前に姿を現してきました。また、その価値が明らかになったことで、平成18年には国史跡「仙台郡山官衙遺跡群－郡山官衙遺跡 郡山廃寺跡－」として指定されています。今年度、本市では「史跡仙台郡山官衙遺跡群 保存活用計画」を策定いたしました。「保存活用計画」では史跡整備の基本的な方向性を示しており、今後取り組んでいく「整備基本計画」の策定に向けて、より具体的な計画の検討に取り組んでいく所存でございます。

また、今年度も国史跡 陸奥国分寺跡の範囲確認調査を実施いたしました。史跡地北側における寺院の様相についてはこれまで不明な部分が多い状況でしたが、令和3年度より継続して実施した発掘調査によりその様相が少しずつ明らかになってきました。引き続き史跡地内での発掘調査を実施し、史跡整備に資するための情報を収集・整理・公開し、市民の皆さまに成果を還元出来るよう取り組んでいく所存でございます。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書刊行に際して、ご協力、ご助言いただきまして多くの皆様に心より感謝申し上げます。

令和6年3月

仙台市教育委員会
教育長 福田 洋之

例 言

1. 本書は、国庫補助事業における市内遺跡調査のうち、郡山遺跡・陸奥国分寺跡の史跡内での範囲確認調査に加え、郡山遺跡内において今年度実施した発掘調査の概要報告書である。
2. 本概報は調査速報を目的としている。本書の作成は調査調整係の協力を得て整備活用係がまとめた。各作業は職員の指示のもと以下のように分担し、執筆および編集は調査担当者と調整の上、妹尾が行った。
遺物基礎整理～実測図作成：郡山遺跡発掘調査事務所作業員
遺物観察表作成：妹尾 遺物写真撮影：向田整理室作業員
遺構図トレース・図版作成：妹尾、郡山遺跡発掘調査事務所作業員
遺構註記表作成：各調査担当者
3. 本書の内容は既に公開されている遺跡見学会資料や各種の発表会資料に優先する。
4. 本書に係る出土遺物や実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 断面図の標高値は、海拔高度（T.P）を示している。
2. 図中の座標値は世界測地系（2011）を使用している。しかし、第2章の図中に示した座標系は、郡山遺跡でのこれまでの調査との整合性を保つため、任意の原点（X=0、Y=0）を通る磁北線（1984年頃の偏角で、真北から6° 44' 7" 西傾）を基準にして設定された座標値を併せて記している。
3. 文中の方位は、真北を基準としている。また、図中の方位に「☆」を付したものは真北を示している。
4. 遺構の略称は次のとおりである。郡山遺跡の遺構番号はこれまで調査された調査区を通しての番号順であるが、ビットは調査区毎としている。
SA：材木列跡・柱列跡 SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SF：築地堀跡 SK：土坑
SI：堅穴住居跡 SX：性格不明遺構 P：ビット・柱穴
5. 遺物の略号は次のとおりである。
C：土師器（ロクロ不使用） E：須恵器 F：軒丸瓦・丸瓦 G：軒平瓦・平瓦 H：道具瓦 K：石製品 P：土製品
6. 土師器実測図における網掛けは、黒色処理を示している。
7. 遺物観察表中の法量で（ ）が付いた数字は、図上で復元した推定値ないし残存値である。
8. 遺物写真の縮尺は、遺物図版に掲載した同一個体のそれに準ずる。写真掲載のみの遺物は、特別な記載がない限り3分の1で掲載している。
9. 遺構観察表中の土色については「新版標準土色帖」（小山・竹原 1989）を使用した。
10. 第1図は国土地理院発行の1：25000「長町」を、また第2図および各調査区位置図は仙台市発行の「2千5百分の1都市基本図」をそれぞれ修正使用した。

目 次

第1章 はじめに	
I. 調査体制	1
II. 調査計画と実績	1
1. 調査計画	2.
2. 調査実績	
第2章 郡山遺跡	
I. 第328次発掘調査	4
1. 調査経過と調査方法	2. 基本層序
3. 検出遺構と出土遺物	4. まとめ
II. 第329次発掘調査	19
1. 調査経過と調査方法	2. 基本層序
3. 検出遺構と出土遺物	4. まとめ
III. 第332・333次発掘調査	35
1. 調査経過と調査方法	2. 基本層序
3. 検出遺構と出土遺物	4. まとめ
IV. 第327・330・331次発掘調査	40
1. 第327次調査	2. 第330次調査
3. 第331次調査	
第3章 陸奥国分寺跡	43
I. 第33次発掘調査	
1. 調査経過と調査方法	2. 基本層序
3. 検出遺構と出土遺物	4. まとめ
第4章 調査成果の普及と関連活動	59

第1章 はじめに

Ⅰ. 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 文化財課長 長谷川蔵人

整備活用係 係長 佐伯修一 主査 菅原翔太、沼倉幸司、堀江洋介 総括主任 津田植之

主任 大江美智代 主事 五十嵐愛、妹尾一樹 会計年度職員 伊藤徳高

調査調整係 係長 及川謙作 主任 佐竹直人、狩野祐介

主事 澤目雄大、須貝慎吾、佐藤恒介、早川太陽、吉田大、石倉蓮、山口沙織、小岩優日

本報告書に掲載する各調査の担当職員は以下の通りである。

- ・郡山遺跡 第327次（妹尾・山口）、第328・329次（妹尾・堀江）、第330次（山口・須貝・佐藤・狩野）、第331次（及川・石倉）、第332・333次（妹尾・小岩）

- ・陸奥国分寺跡 第33次（妹尾・堀江）

発掘調査・整理作業を適正に実施するため「郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会」を設置し、指導・助言を受けた。

委員長 永田英明（東北学院大学文学部教授 古代史）

副委員長 渡部育子（秋田大学教育文化学部名誉教授 古代史）

委員 荒木志伸（山形大学学士課程基盤教育機構准教授 考古学）、伊藤恵子（仙台市学校教育課）

北野博司（東北芸術工科大学芸術学部教授 考古学）、黒田乃生（筑波大学芸術系教授 造園）、

菅原玲（東北工業大学地域連携センター 主任）、松公男（郡山矢来町内会会長）、

三上喜孝（国立歴史民俗博物館教授 古代史）、吉田歙（山形県立米沢女子短期大学教授 古代史）

Ⅱ. 調査計画と実績

1. 調査計画

令和5年度に計画した本書掲載の調査は、国庫補助事業である「市内遺跡発掘調査」の一部として計画し、郡山遺跡を対象としている。

郡山遺跡では史跡整備に係る調査は第5次5ヶ年計画終了後に平成17年度から補足調査を実施しており、今年度は2箇所で行った。個人住宅建築に関わる調査を3箇所で行った。また、陸奥国分寺跡では史跡整備に係る調査を所轄的に行っており、今年度は4箇所で行った。

発掘調査総経費は23,442,000円（国庫補助金額11,721,000円）の予算で計画し、当初は郡山遺跡の個人住宅対応に5,852,686円、郡山遺跡の範囲確認調査に2,177,683円、陸奥国分寺跡の範囲確認調査に2,634,919円、「仙台平野の遺跡群」として郡山遺跡以外の市域全体の個人住宅対応に5,283,066円、仙台北城跡調査に7,493,646円とした。これによって本書の掲載に関わる発掘調査の実施計画を立案した。

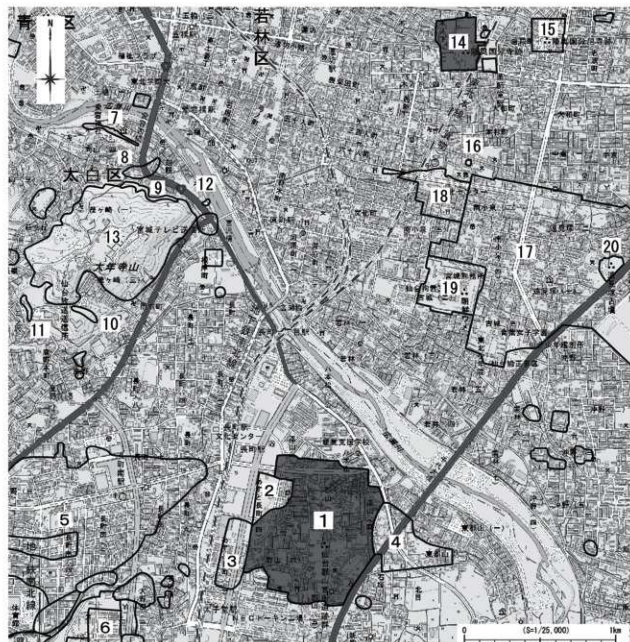
2. 調査実績

郡山遺跡については、令和5年度は7件の調査を実施した。このうち本報告書では、国庫補助事業の対象となる

表1 令和5年度発掘調査計画

遺跡名	調査地区	調査予定面積	調査予定期間	調査理由
郡山遺跡	官衙内部など5箇所	150㎡	令和5年5月～令和6年3月	個人住宅建築
郡山遺跡	豊期官衙中核部2箇所	200㎡	令和5年5月～8月	範囲確認調査
陸奥国分寺跡	史跡地北東部4箇所	300㎡	令和5年8月～11月	範囲確認調査

個人住宅建築に関わる調査（第329・332・333次）に加え、範囲確認調査の第328次調査の報告を行う。また各種開発に伴う小規模調査（第327・330・331次）の概略を記す。あわせて、陸奥国分寺跡で実施した範囲確認調査（第333次調査）の結果を本書で報告する。



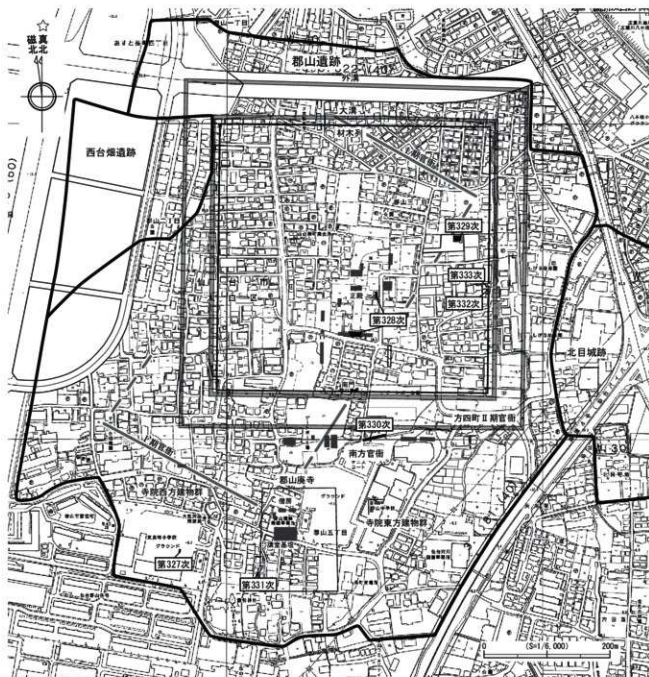
番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	郡山遺跡	官衙・寺院・散布地	自然成防	縄文～古代	11	二ツ岩横穴墓群	横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
2	西台横遺跡	散居	自然成防	縄文～古代	12	三ツ岩横穴墓群	横穴墓群	丘陵	古墳後
3	長町聖東遺跡	散居	自然成防	縄文～古代	13	浅ヶ崎城跡	城跡	丘陵	中世
4	北目城跡	城跡・集落・水堀	自然成防	縄文～近世	14	陸奥国分寺跡	寺院	段丘	奈良・平安
5	富沢遺跡	城跡・水田・散布地	後背堀地	後期古石器～近世	15	陸奥国分寺跡	寺院	段丘	奈良・平安
6	大野田官衙遺跡	官衙跡・集落跡・古墳	自然成防	古墳～奈良	16	法興寺古墳	円墳	自然成防	古墳後
7	愛宕山横穴墓群A地点	横穴墓群	丘陵斜面	古墳後	17	南小泉遺跡	稲敷・集落跡	自然成防	縄文～近世
8	愛宕山横穴墓群B・C地点	横穴墓群	丘陵斜面	古墳後	18	後藤園遺跡	集落・稲敷・散布地	自然成防	縄文・古墳・平安・中世・近世
9	大年寺山横穴墓群	横穴墓群	丘陵斜面	古墳後	19	若林城跡	城跡・古墳・集落	自然成防	古墳・平安・中世・近世
10	浅ヶ崎横穴墓群	横穴墓群	丘陵斜面	古墳後～奈良	20	遠見屋古墳	前方後円墳・散布地	自然成防	弥生・古墳中

第1図 郡山遺跡・陸奥国分寺跡と周辺の主な遺跡

1. 調査体制

表2 令和5年度発掘調査実績

調査次数	調査地区	調査面積 (㎡)	調査期間	調査原因	対応
郡山遺跡第327次	遺跡南西部	17	令和5年4月10日	校舎増築	開発に伴う事前調査
郡山遺跡第328次	I期官街中央・方四町Ⅱ期官街中南部	225	令和5年6月19日～9月15日	遺跡確認	範囲確認調査
郡山遺跡第329次	I期官街東辺・方四町Ⅱ期官街東部	97	令和5年5月9日～6月16日	個人住宅建築	郡山遺跡13ヵ所調査
郡山遺跡第329次	Ⅱ期 南方官街地区	119	令和5年7月7日～7月28日	管線確認	開発に伴う事前調査
郡山遺跡第331次	Ⅱ期 郡山慶寺地区西辺	4	令和5年11月6日	深さ確認調査	開発に伴う事前調査
郡山遺跡第332次	方四町Ⅱ期官街東辺材木列	21	令和5年12月1日～12月15日	個人住宅建築	郡山遺跡13ヵ所調査
郡山遺跡第333次	方四町Ⅱ期官街東辺材木列	15	令和5年12月1日～12月15日	個人住宅建築	郡山遺跡13ヵ所調査
陸奥国分寺跡第33次	遺跡北東部	169	令和5年9月21日～12月5日	遺跡確認	範囲確認調査



第2図 郡山遺跡調査地点位置図

I. 第328次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

本調査は史跡整備に伴う範囲確認調査である。本件は現状変更許可申請を提出し、文化庁より令和5年5月26日付5文庁第678号で許可を得ている。

郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙中枢部における建物配置およびその規模の確認を主要な目的として調査を実施した。発掘調査は6月19日から開始した。6月19～20日に1区、同20日に2区の盛土および基本層1層(現代の耕作土層)を重機により除去し、21日より精査を開始した。調査は1・2区並行して行った。7月14日には現地にて指導委員会を開催し、各委員より助言を頂いた。調査は9月12日までにすべての調査を終了し、9月13・14日に遺構の保護のため、土嚢袋およびブルーシートにより上面を保護した上、重機により埋め戻しを行った。

調査区は方四町Ⅱ期官衙中枢部における正殿跡(SB1250)から南に約90mの地点(1区)と南東約45mの地点(2区)の2箇所を設定した。1区は第55・102・319次調査で確認された中軸線を挟んで東西対称に配置される東西棟の掘立柱建物跡(SB716・1490)の梁行部分の精査および2棟の建物間における遺構の有無確認を目的として調査区を設定した。また、2区は第313・319次調査で確認された2棟の掘立柱建物跡(SB2584・2599)の規模・構造を確認し、政庁城東部の建物配置を確認することを目的として調査区を設定した。調査区の規模は、1区は東西22m、南北9m、2区は東西3.5m、南北10mの規模である。

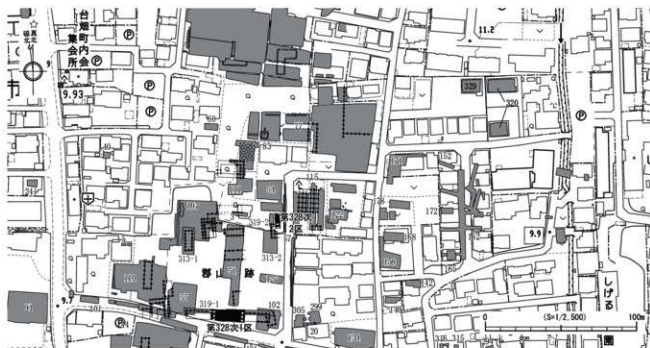
遺構の記録は平面・断面図をS=1/20で作成し、記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。

2. 基本層序

基本層は大別2層確認した。Ⅰ層は現表土および耕作土で、Ⅱ層上面は古代の遺構検出面である。地表面からⅡ層上面までの深さは1区で75～95cm、2区で58～83cmである。

3. 検出遺構と出土遺物

検出された遺構は1区で柱列1列、掘立柱建物跡3棟、竪穴住居跡1軒、溝跡5条、土坑11基、ピット28基、2区で掘立柱建物跡1棟、溝跡2条、土坑1基、ピット・柱穴6基である。遺物は各基本層および遺構から土師器、須臾器、陶器、磁器、石製品、鉄製品が出土した。なお、本報告で記述の無い遺構については過去の調査(第55・



第3図 第328次調査区位置図

102・319 次)の報文を参照されたい。

1 区の検出遺構と出土遺物

【SI2645 竪穴住居跡】(第 4 図)

調査区東側で検出された。北東部は SD767 溝跡と重複するため、南辺を除く 3 辺の規模は不明である。南辺の検出長は 349 cm で、方位は E-35.18° -S である。削平を受けており、検出面より深さ 3 cm 程度しか残存していない。西壁付近で 40 cm 前後の不整形の範囲で焼土が広がることから、周囲に燃焼施設があったと考えられるが、その他の施設は検出されない。遺物は土師器片 7 点が出土した。SD767 溝跡、SK2648・SK2654 土坑・P4 より古い。

【SA2652 柱列跡】(第 4・5 図)

調査区中央の SB716・1490 掘立柱建物跡の間で 2 基の柱穴 (P1・P2) が検出された。2 基の柱穴は SB716・1490 掘立柱建物跡の南桁行を結んだ直線上に位置している。SD710 溝跡等により検出面から P1 が 58 cm、P2 が 28 cm 以上の削平を受けている。確認された掘方規模は P1 が南北長 101 cm、東西長 55 cm の不整形長方形、P2 が南北長 106 cm、東西長 53 cm の隅丸長方形を呈する。柱痕跡の直径はいずれも 28 cm である。P1 では柱痕跡に沿うように 10～15 cm 大の円礫が検出された。2 基の柱穴の間隔は 346 cm であり、方位は E-3.65° -S とやや東傾する。2 基の柱穴との間隔と比べ、P1 と SB716 掘立柱建物跡は 770 cm、P2 と SB1490 掘立柱建物跡は 757 cm とそれぞれ離れているが、その間には柱穴等関連する遺構は検出されない。また、遺物は出土していない。SD710 溝跡、SK2649・2650・2651 土坑より古い。

【SB716A・B 掘立柱建物跡】(第 4・5 図)

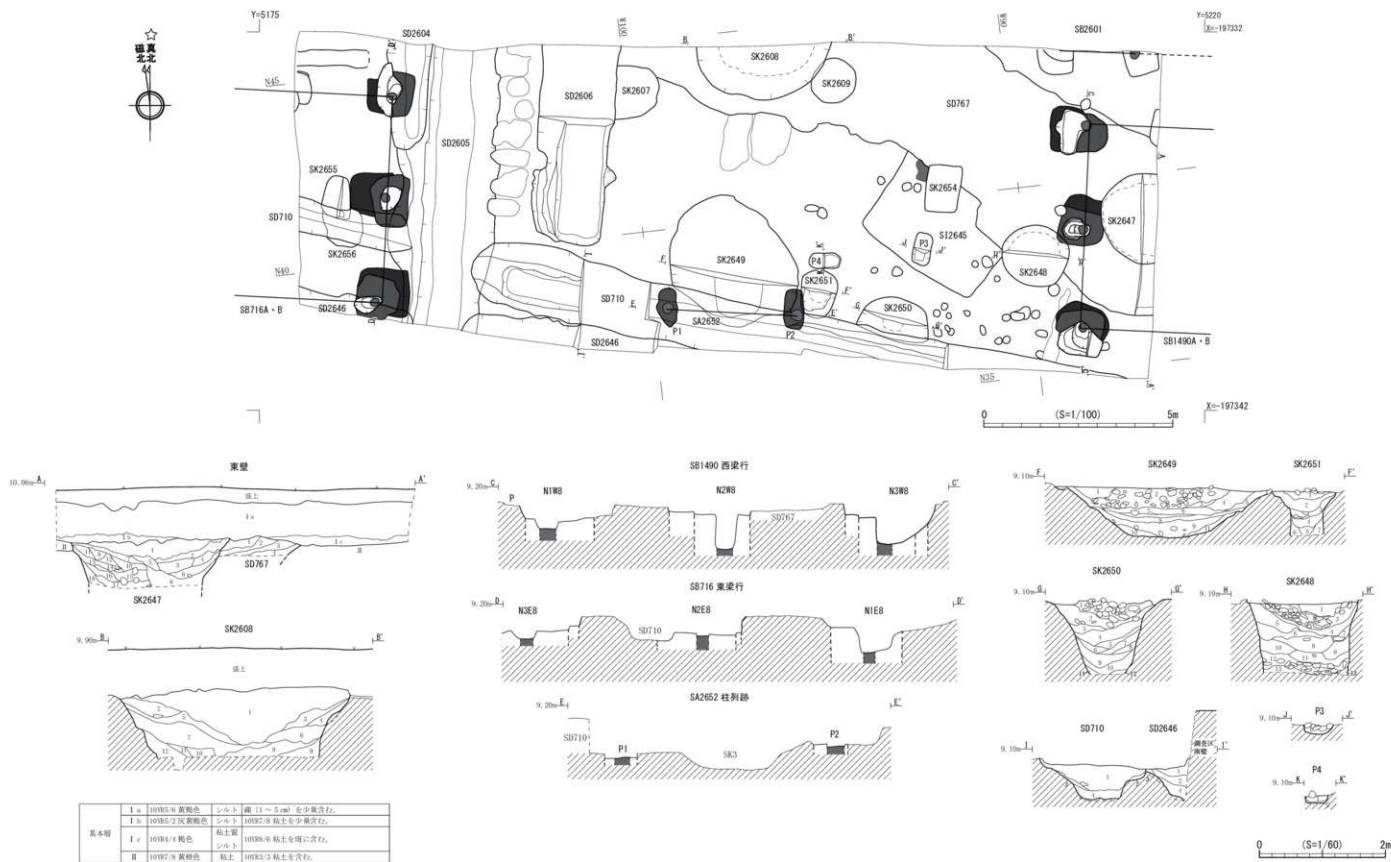
調査区西側で検出された東西棟の掘立柱建物跡で、第 55 次調査で北桁行および西梁行の一部を、第 319 次調査で北桁行の規模が確認されており、東梁行の柱穴 (N2W8・N3W8) の精査を新たに実施した。規模は東西 7 間 (総長 18.5 m、柱間間隔 230～290 cm)、南北 2 間 (総長 5.5 m、柱間間隔 270～275 cm) であり、北桁行を基準とした方位は E-2.95° -S と真北方向よりやや東傾する。柱穴掘方の規模は一辺 80～110 cm の隅丸方形を呈する。すべての柱穴掘方は重複が確認され、ほぼ同位置での建て替えが認められる。柱痕跡は直径 25～30 cm で、すべての柱穴で柱の抜き取り穴を伴っている。抜き取り穴は検出面より 45～63 cm の深さまで及んでいる。遺物は掘方から土師器片 28 点、須恵器片 1 点のほか鉄滓が 2 点出土した。SD710・2604・2605・2646 溝跡、SK2655・2656 土坑より古い。

【SB1490A・B 掘立柱建物跡】(第 4・5 図)

調査区東側で検出された東西棟の掘立柱建物跡で、第 102 次調査で東梁行を含めた東半部を、第 319 次調査で北桁行の規模が確認されており、西梁行の柱穴 (N2E8・N3E8) の精査を新たに実施した。規模は東西 7 間 (総長 18.2 m、柱間間隔 240～260 cm)、南北 2 間 (総長 5.4 m、柱間間隔 265～280 cm) の規模であり、北桁行を基準とした方位は E-2.42° -S と真北方向よりやや東傾する。柱穴掘方の規模は一辺 70～100 cm の隅丸方形を呈する。すべての柱穴掘方は重複が確認され、ほぼ同位置での建て替えが認められる。柱痕跡は直径 20～30 cm である。すべての柱穴で柱の抜き取り穴を伴っている。抜き取り穴は検出面より 35～53 cm の深さまで及び、遺物は掘方から土師器片 38 点、須恵器片 2 点が出土した。SI1495 竪穴住居跡、SD767 溝跡より新しく、SK2647・2648 土坑より古い。

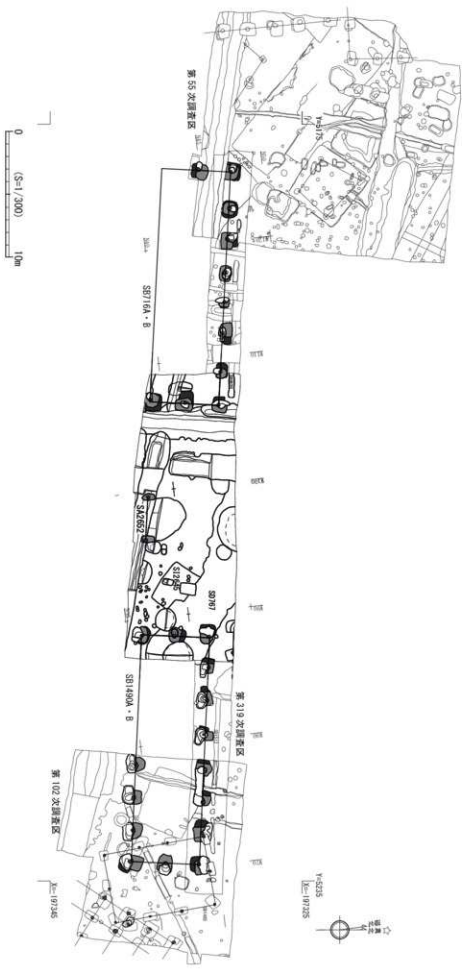
【SD767 溝跡】(第 4 図)

調査区中央で検出された調査区を北西-南東方向に横断する溝跡で、その両端は調査区外へ延びる。第 55・319 次調査で検出された SD767 溝跡と同一の遺構と考えられる。検出長 14.6 m、上幅 335～451 cm で、方位は E-29.38～34.3° -S である。調査では断面観察用のベルトは設定しなかったが、SK2608 土坑を調査した際の壁面



第 328 次調査 1 区 遺構土層注記表

[illegible]



第5図 第328次1区および周辺調査区における道路配置図

より検出面から下端までの深さは100cmであることが確認された(写真図版2-6)。また壁面は検出面より20cm程の深さまでは緩やかに傾斜するが、20cm以下は傾斜が変わり比較的直立に近くなる。堆積土はその全てに基本層Ⅱ層由来のブロックを含むことから、最終的に埋め戻されたと考えられる。壁面の傾斜が変化し、上端の平面プランが凹凸していることから、埋め戻しに伴って整地等の作業を同時に行っている可能性がある。遺物は土師器片38点、須恵器片2点、鉄滓2点のほか、羽口が1点出土した(第7図3)。SI2645 堅穴住居跡より新しく、SB1490 掘立柱建物跡、SK2607・2608・2609・2647・2648・2654 土坑より古い。

【SD710 溝跡】(第4図)

調査区南側を北西-南東方向に横断する溝跡で、その両端は調査区外へ延びる。第55次調査SD710、第102次調査SD1518 溝跡と同一の遺構と考えられる。検出長22.6m、上幅169cmで方位はE-12.5°-Sである。検出面からの深さは最大65cmで、底面は部分的に段を持ち落ち込む箇所がある。遺物は土師器片10点、須恵器片2点、陶器9点、磁器4点のほかガラス片が出土した。SA2655 柱列跡、SB716 掘立柱建物跡、SD2605・2646 溝跡、SK2649・2650・2651・2655・2656 土坑より新しい。

【SD2604 溝跡】(第4図)

調査区北西で検出された南北方向の溝跡で北側は調査区外へ延びる。検出長2.9m、上幅113cmで方位はN-3.5°-Wである。検出面からの深さ65cmで、遺物は出土していない。SB716 掘立柱建物跡、SD2605 溝跡より新しい。

【SD2605 溝跡】(第4図)

調査区西側で検出された南北方向の溝跡でその両端は調査区外へ延びる。検出長7.6m、上幅241cmで方位はN-3.1°-Eである。検出面からの深さは68cmで、西壁は幅15~26cmの平坦面が設けられる。遺物はガラス片が出土した。SB716 掘立柱建物跡、SD710・2646 溝跡より新しく、SD2604 溝跡より古い。

【SD2606 溝跡】(第4図)

調査区西側で検出された南北方向の溝状の掘り込みで北側は調査区外へ延びる。検出長5.1m、上幅255cmで方位はN-5°-Eである。検出面からの深さ105cmで、壁面はほぼ直立に立つが、西壁では検出面から深さ10cm程度までは緩やかに傾斜する。遺物は土師器片21点、須恵器片5点、陶器片2点、磁器片1点、いぶし瓦5点が出土した。SK2607 土坑より新しい。

【SD2646 溝跡】(第4図)

調査区南西部を北西-南東方向に横断する溝跡で上端北辺のみ確認した。その両端は調査区外へ延びる。検出長7.8m、上幅67cm以上で方位はE-7.9°-Sである。検出面からの深さ64cmで遺物は土師器片8点、須恵器片4点が出土した。SB716 掘立柱建物跡、SD2605 溝跡より新しく、SD710 溝跡より古い。

【SK2608 土坑】(第4図)

調査区中央で検出された。第319次調査では平面検出に留めていた。南側の一部が検出され、調査区外へと続いている。南北長1.5m以上、東西長3.8mで、全体の平面形は不明であるが半円形を呈している。安全面を考慮し、検出面から深さは130cmまでの掘削に留め、底面は確認されなかった。堆積土は12層に分層され、埋め戻しに伴い5~30cm大の円礫が含まれる。遺物は土師器が9点、須恵器が5点、陶器が1点、鉄滓が1点出土した。SD767 溝跡、SK2609 土坑より新しい。

【SK2647 土坑】(第4図)

調査区東端で検出された。西側の一部が検出され、調査区外へと続いている。南北長242cm、東西長156cm以上で、全体の平面形は不明であるが半円形を呈している。安全面を考慮し、検出面から深さは80cmまでの掘削に留め、底面は確認されなかった。堆積土は18層に分層される。遺物は土師器が19点、鉄滓が11点出土した。SB1490 掘立柱建物跡、SD767 溝跡より新しい。

【SK2648 土坑】(第 4 図)

調査区東側で検出された。南北長 164 cm、東西長 179 cm の円形を呈する。安全面を考慮し、検出面から深さ 110 cm までの掘削に留め、底面は確認されなかった。堆積土は 13 層に分層され、埋め戻しに伴い 5 ~ 30 cm 大の円礫が含まれる。遺物は土師器片が 6 点出土した。SI2645 堅穴住居跡、SB1490 掘立柱建物跡、SD767 溝跡より新しい。

【SK2649 土坑】(第 4 図)

調査区南側で検出された。南北長 337 cm、東西長 344 cm の不整形円形を呈する。深さは 78 cm で堆積土は 11 層に分層され、埋め戻しに伴い 10 ~ 20 cm 大の円礫が含まれる。遺物は土師器片 7 点、須恵器片 4 点、平瓦 2 点が出土した。SA2652 柱列跡より新しく、SD710 溝跡より古い。

【SK2650 土坑】(第 4 図)

調査区南東で検出された。南北長 108 cm、東西長 195 cm で、SD710 溝跡に削平されるため詳細は不明だが、平面形状は円形を呈すると考えられる。検出面より深さ 116 cm までの掘削に留め、底面は確認されなかった。堆積土は 12 層に分層され、埋め戻しに伴い 5 ~ 20 cm 大の円礫が含まれる。遺物は土師器片 11 点、須恵器片 3 点、鉄滓 2 点が出土した。SA2652 柱列跡より新しい。

【SK2651 土坑】(第 4 図)

調査区南側で検出された。南北長 128 cm、東西長 96 cm の隅丸長方形を呈する。検出面から深さ 70 cm まで掘り下げたが底面は確認されなかった。堆積土は 7 層に分層される。遺物は陶器 1 点が出土した。SA2652 柱列より新しく、SD710 溝跡より古い。

【SK2654 土坑】(第 4 図)

調査区北東で検出された。平面プランの検出のみに留めている。南北長 127 cm、東西長 89 cm の隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは 10 cm 以上あり、遺物は出土していない。SI2645 堅穴住居跡、SD767 溝跡より新しい。

【SK2655 土坑】(第 4 図)

調査区西側で検出された。南北長 114 cm、東西長 78 cm の隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは 25 cm で、底面は南側に寄っている。遺物は出土していない。SB716 掘立柱建物跡、SK2656 土坑より新しく、SD710 溝跡より古い。

【SK2656 土坑】(第 4 図)

調査区西側で検出された。平面プランの検出のみに留めている。南北長 98 cm、東西長 109 cm の隅丸長方形を呈する。SD710 溝跡、SK2655 土坑によって削平されており深さは検出面から 30 cm 以上ある。遺物は出土していない。SD710 溝跡、SK2655 土坑より古い。

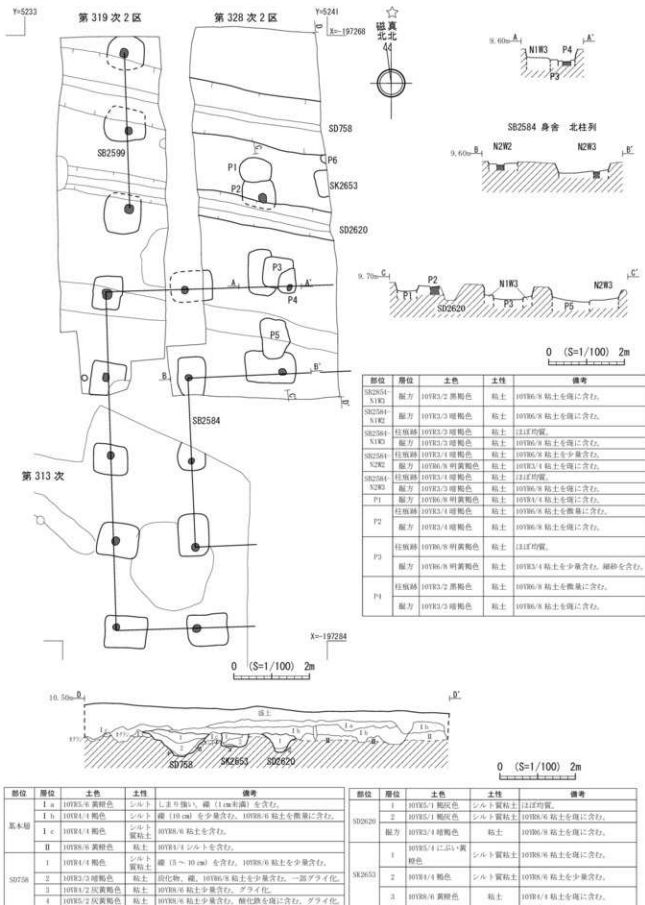
【ビット】(第 4 図)

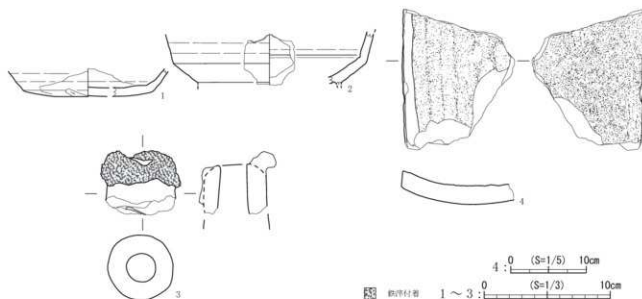
調査区全体で 28 基のビットの可能性のあるプランを確認したが、いずれも柱痕跡は検出されない。このうち P3・4 では 5 ~ 15 cm 大の礫が含まれる。遺物は P3 から須恵器が出土した(第 7 図 1)。

2 区の検出遺構と出土遺物

【SB2584 掘立柱建物跡】(第 6 図)

第 313・319 次調査で一部が確認された廂付の東西棟建物跡である。その北面廂と北桁行の一部(N1W3・N2W2・N2W3)の精査を新たに実施した。規模は桁行 2 間以上(総長 4.6 m 以上、身舎部分柱間間隔 248 cm、廂部分柱間間隔 213 cm)、梁行 4 間(総長 9.0 m、身舎部分柱間間隔 219 ~ 228 cm、廂部分柱間間隔 206 ~ 237 cm)、西梁行を基準とした方位は N - 1.75° - W とやや西傾する。柱穴掘方の規模は一辺 72 ~ 133 cm の隅丸長方形を基調とする。柱痕跡の直径は 18 ~ 27 cm である。遺物は掘方から土師器片 16 点、須恵器片 10 点が出土した。P3・4・5 より古い。





図面番号	登録番号	出土遺構	層位	種類	器種	寸法 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
1	E-409	2区-P3	1	須恵器	杯	-	(10, 4)	(2, 2)	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ		3-1
2	E-408	1区-P3		須恵器	残端	-	-	(4, 6)	ロクロナデ	ロクロナデ		3-2

図面番号	登録番号	出土遺構	層位	種類	器種	寸法 (cm)			備考			写真図版
3	P-81	1区-SD758	検出面	土製品	羽口	(8, 1)	6, 3	1, 6	鉄滓付着。外面は受熱により変色。孔径2〜2.4cm。			3-3
4	G-183	1区-SK209	検出面	瓦	平瓦	(18, 6)	(14, 9)	2, 4	頭面：布目肌・横条筋。凸面：縄目・ヘラナデ。側面：布目肌・ヘラケズリ			3-4

第7図 第328次調査出土遺物

【SD758 溝跡】(第6図)

東西方向の溝跡でその両端は調査区外へと延びる。その位置と規模から第57・319次調査で検出されたSD758溝跡と同一の遺構と考えられる。方位はE-10.4°-Sで検出長3.5m、上幅175cm、下幅31cmの規模である。深さは66cmで断面形状は逆台形状を呈する。堆積土は4層に分層された。遺物は土師器片16点、須恵器片2点、磁器片4点が出土している。P6より新しい。

【SD2620 溝跡】(第6図)

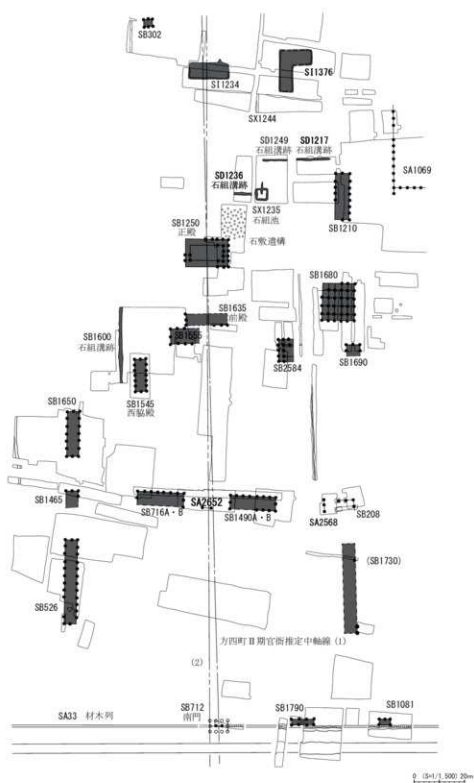
東西方向の溝跡で、その両端は調査区外へと延びる。その位置と方向から第57次調査のSA757柱列跡、第319次のSD2620溝跡と同一の遺構と考えられる。方位はE-10.7°-Sで検出長3.7m、上幅88cm、下幅23cmの規模である。深さは50cmで断面形状は逆台形状を呈し、底面は平坦である。堆積土は2層に分層された。遺物は土師器片5点、須恵器片1点、陶器片1点が出土している。P2より新しい。

【SK2653 土坑】(第6図)

西側の一部が検出され、調査区外へと続いている。東西長38cm以上、南北長71cmで平面形は不明であるが隅丸方形を呈すると考えられる。深さは30cmで、堆積土は3層に分層される。遺物は出土していない。

【柱穴・ビット】(第6図)

SB2584掘立柱建物跡を構成する柱穴を除き、6基の柱穴の可能性あるプランが検出された。このうちP2・4では柱痕跡が確認された。P2・3・5の中心は一直線(傾きN-6°-W)に約190〜200cm間隔で並び一連の遺構になる可能性があるが、P3・5で柱痕跡が確認されないことからその詳細は不明である。P2は1辺約80cmの隅丸方形を呈し、柱痕跡の直径は26cmで、SD2620より古く、P1より新しい。P4は1辺47〜61cmの不整形方形を呈し、柱痕跡の直径は16cmで、SB2584掘立柱建物跡とP3より新しい。遺物はP1で土師器片が10点、須恵器片が7点、



第8図 方四町Ⅱ期官衙中核部主要遺構配置図

P2 から土師器片が 3 点、P3 で須恵器片が 1 点（第 7 図 2）が出土した。

4. まとめ

第 328 次調査 1 区は郡山遺跡の方四町Ⅱ期官衙中核部に位置し、Ⅰ期官衙においては中核部の南側に展開する雑倉群周辺である。調査ではⅠ期官衙に関連する遺構は SD767 溝跡があり、Ⅱ期官衙に関連する遺構は SA2652 柱列跡・SB716・1490 掘立柱建物跡がある。また、SI2645 堅穴住居跡はⅠ期官衙に関連、もしくはそれ以前の時期の遺構の可能性がある。その他検出された SD710・2604・2605・2606・2646 溝跡、SK2608・2651 土坑は出土遺物および重複関係から比較的新しい時期の遺構と判断され、SK2647・2648・2649・2650・2655・2656 土坑は詳細な時期は不明であるが、郡山Ⅱ期官衙廃絶後の遺構と判断される。

SD767 溝跡は北西延長の第 55 次調査 SD767 溝跡と一連の遺構と考えられ、さらに北西延長の第 110 次調査で検出された SD552・536 溝跡と直交しており一連の遺構と考えられる。これら一連の溝跡を挟んで、北側は中核部とそれに隣接する総柱建物で建ち並ぶ倉庫院（南）が位置し、南側には掘立柱建物跡と堅穴建物による雑倉群が位置しているため、これら機能の異なる空間を区画するための溝跡であったと考えられている。第 110 次調査では溝跡の重複が確認されるため、少なくとも 2 時期の変遷があったと推定される。

この溝跡に切られる SI2645 堅穴住居跡は調査で検出された遺構の中で最も古い遺構に位置づけられる。周辺では第 44・48・55・116 次調査で同規模、同一方向の堅穴住居跡が検出されており、これらはⅠ期官衙に関連する遺構群と考えられている。これら遺構の中には第 44 次調査 SI549 堅穴住居跡のように前述した区画溝との距離が約 2m と近接しているものもある。

SB716・1490 掘立柱建物跡は方四町Ⅱ期官衙の政庁域を構成する建物跡と考えられ、今回新たに梁行部分の調査を行った。その結果、2 棟の建物跡は南北方向においてもほぼ同規模であり、これまでの調査と同様にすべての柱穴で掘方の重複と柱の抜き取り穴が検出された。また、これら建物を南桁行結んだ地点に 2 基の柱穴が検出された（SA2652 柱列跡）。柱列跡と建物跡との距離はそれぞれ SB716 掘立柱建物跡が 770 cm、SB1490 掘立柱建物跡が 757 cm と間隔が近似し、規則的に配置されていると考えられる。また、柱痕跡の直径も 28 cm と中核建物と比べても遜色ない規模でありことから関連遺構と考えられる。

なお、郡山遺跡のⅠ期官衙中核部においては板塀により四方が区画され、板塀の内側に塀に取り付くように複数棟の側柱建物跡が存在している。そして入り口となる東辺ではその掘立柱建物跡の東柱筋上に門跡が検出されている。また、初期国府を見てみると、初期の常陸国府においても、中核城南辺に配置された 2 棟の建物跡の間に 2 本柱の門が検出されている（石岡市教育委員会 2009）。今回検出された、SA2652 柱列跡の性格については政庁部における門等の区画施設の可能性が挙げられるが、方四町Ⅱ期官衙においてこれまで政庁範囲の明確な区画施設は検出されておらず、どの範囲が政庁部として認識されたかについては現在のところ不明である。そのため、周辺での調査を重ね、調査区周辺が政庁城南辺となるかについて改めて検討していく必要がある。

2 区では掘立柱建物跡が 1 棟（SB2584）検出された。これまでの調査で西・南面で廂部分が確認されていたが新たに北面にも廂が付くことが確認された。本遺構はその位置と構造からⅡ期官衙における重要な役割を持った建物跡であった可能性があり、その機能について検討していく必要がある。

また、第 319 次調査で検出された SB2599 掘立柱建物跡は柱穴を結んだ方向より、Ⅱ期官衙に関連する遺構と考えられるが、本調査区では検出されなかったことから、第 319 次 2 区から西側に展開する建物跡になることが想定される。



1. 328次 1区調査区全景（上が北）

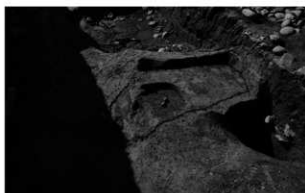


2. SA2652 柱列跡（南西から）

写真図版1 郡山遺跡跡第328次調査（1）



1. SA2652-P1 柱穴（南から）



2. SA2652-P2 柱穴（南東から）



3. 調査区全景（南西から）



4. SB1490-N3E8 柱穴（南西から）



5. SB716 掘建柱建物跡東梁行部分（南東から）



6. SD716 溝跡断面（西から）



7. SK2649 土抗土層断面（南東から）



8. SK2648 土抗土層断面（北から）

写真図版 2 郡山遺跡跡第 328 次調査（2）



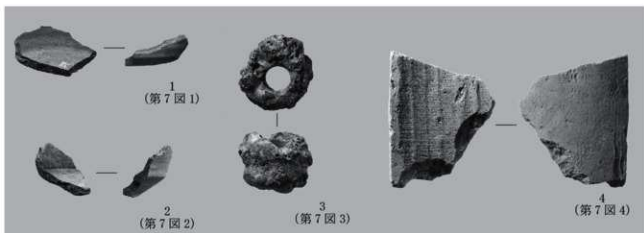
1. 328次 2区調査区全景（上が北）



2. SB2854-N2W2 柱穴（北東から）



3. SB2854-N1W3 柱穴（西から）



写真図版3 郡山遺跡第328次調査（3）・出土遺物

II. 第329次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

令和5年4月6日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和5年4月10日付R5教生文第121-7号で通知）に基づき発掘調査を実施した。

調査は5月9日に着手した。建築予定範囲において東西12m、南北8mの規模の調査区を設定した。

5月9～10日にかけて重機により地表面から深

さ約0.8mまで掘削を行い、基本層Ⅰ～Ⅲ層を除去したのち、Ⅳ層上面で精査を行った。調査では竪穴住居跡1軒、柱列跡1列、溝跡6条、土坑5基、性格不明遺構1基、ピット11基が検出された。

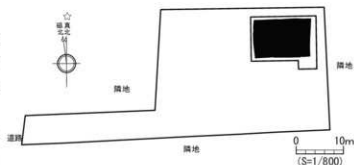
遺構の記録は、調査区平面図および壁面断面図（S=1/20）を作成し、記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。埋め戻しは6月14～15日にかけて行い、16日に機材を撤収し調査を終了した。

2. 基本層序

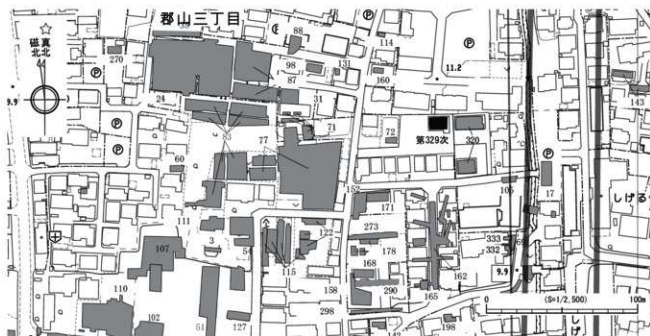
調査では、盛土（層厚約0.2～0.4m）の下に基本層が大別5層細別6層確認された。遺構はⅢ・Ⅳ・Ⅴ層上面で遺構が検出された。Ⅲ層は西半部にかけて検出されたⅠ期官衙廃絶後からⅡ期官衙の機能時にかけ行われた整地層と考えられる。また、Ⅳ層上面は削平を受けており調査区南東の一部でしか検出されなかったため、遺構の大部分はⅤ層上面で検出している。Ⅴ層上面までの深さは約0.7mである。

3. 検出された遺構と遺物

遺構はⅢ層上面で竪穴住居跡1軒（SI2635）、溝跡3条（SD2628・2634・2638）、土坑3基（SK2639・2640・SK2642）、Ⅳ層上面で柱列1列（SA2633）、溝跡1条（SD2636）、ピット1基（P1）、Ⅴ層状面で溝跡2条（SD2150・2637）、土坑2基（SK2641・2643）、性格不明遺構1基（SX2644）、ピット8基（P4～11）が検出された。遺物は各遺構より土師器、須恵器、陶器、磁器、土製品、鉄製品が出土した。



第9図 第329次調査区配置図



第10図 第329次調査区位置図

第 329 次調査区 遺構土層注記表

部位	層位	土色	土質	備考
S2638	1	10YR2/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR6/8 粘土を少量含む。
	2	10YR4/4 暗色	シルト質粘土	10YR6/8 粘土を少量含む。
	3	10YR4/4 暗色	粘土	10YR6/8 粘土を含む。
S2634	1	10YR4/8 暗色	シルト	10YR3/3 シルト、10YR6/8 シルト質粘土を境に含む。
	1	10YR4/8 暗色	粘土質シルト	10YR3/3 粘土を含む。
S2636	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR5/6 粘土を境に含む。
	3	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	10YR3/3 粘土を含む。
	1	10YR5/8 黄褐色	粘土質シルト	10YR3/3 粘土を含む。
S2637	2	10YR5/1 灰白色	粘土	10YR3/3 粘土を境に含む。ドライ化。
	3	10YR3/2 黄褐色 + 10Y 7/2 灰白色	粘土	互層状堆積の後、風化している。ドライ化。
	4	10Y6/2 オリーブ灰色	粘土	砂粒を含む。10YR3/2 粘土を含む。ドライ化。
	5	10Y7/2 灰白色	中粒砂～粗粒砂	10Y7/2 粘土を含む。ドライ化。
	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR5/6 粘土に含む。
S2639	1	10YR2/3 黒褐色	粘土	10YR7/8 粘土互層状に堆積。
	2	10YR5/4 に近い黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土を含む。
	1	10YR5/8 黄褐色	シルト質粘土	10YR3/3 粘土を含む。
S2639 壁面	1	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	10YR6/8 粘土に含む。炭化物少量含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR6/8 粘土に含む。

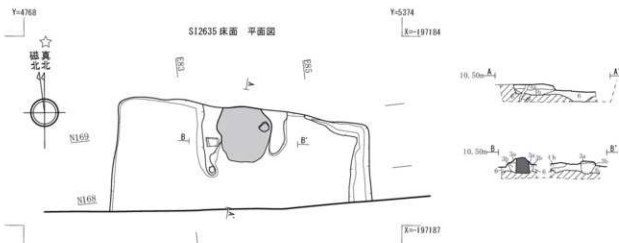
部位	層位	土色	土質	備考
S2640	1	10YR4/4 暗色	シルト質粘土	10YR3/3 粘土を境に含む。
	2	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	10YR5/1 粘土、砂粒を少量含む。
	3	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	砂粒を含む。
S2641	1	10YR5/8 黄褐色	粘土質シルト	10YR3/3 粘土を含む。一部ドライ化。
	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR5/8 粘土を境に含む。
S2643	1	10YR6/8 明黄褐色	シルト質粘土	マンガン粒を含む。10YR3/3 粘土に含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒を含む。10YR6/8 粘土に含む。
S2644	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR5/6 粘土含む。焼土粒散見を含む。
	1	10YR4/4 暗色	シルト質粘土	10YR3/3 粘土を含む。
F4	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR6/8 粘土を含む。縦方埋土。
	3	10YR7/6 明黄褐色	粘土質シルト	10YR5/1 粘土を少量含む。縦方埋土。
	4	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR6/8 粘土、10YR5/1 粘土を含む。縦方埋土。
	5	10YR6/8 黄褐色	粘土質シルト	10YR6/8 粘土を少量含む。縦方埋土。
	6	10YR6/8 黄褐色	粘土質シルト	10YR5/1 粘土を散見に含む。縦方埋土。
F5	1	10YR5/1 灰白色	粘土	10YR3/3 粘土を含む。縦方埋土。
	2	10YR4/4 暗色	粘土質シルト	10YR3/3 粘土を含む。縦方埋土。
F9	1	10YR4/4 暗色	粘土	10YR6/8 粘土を含む。縦方埋土。
	2	10YR5/1 暗褐色	粘土質シルト	10YR6/8 粘土を含む。縦方埋土。
	3	10YR6/8 黄褐色	粘土質シルト	10YR3/3 粘土を少量含む。ドライ化。
F10	1	10YR5/2 オリーブ灰色	粘土質シルト	10YR3/3 粘土を含む。
	2	10YR5/2 オリーブ灰色	粘土質シルト	10YR3/3 粘土を少量含む。
F11	1	10YR	粘土	10YR3/3 粘土を含む。縦方埋土。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR6/8 粘土を含む。縦方埋土。

【SI2635 竪穴住居跡】(第 11～14 図)

調査区南東部に位置し、Ⅲ層上面で検出された。検出されたのは竪穴住居跡の北半部のみで、その南側は調査外へ続く。検出規模は北辺で 398 cm、西辺 182 cm 以上で北壁を基準とした方位は E-6.8° -S と真北より東傾する。堆積土は 6 層に分層され、1 層が住居内堆積土、2 層が白色粘土による貼り床、3 層がカマド構築土、4 層が燃焼部、5 層が周溝堆積土、6 層が掘方埋土である。床面は部分的に削平を受けており、残存する壁高は西壁で 5 cm を測る。

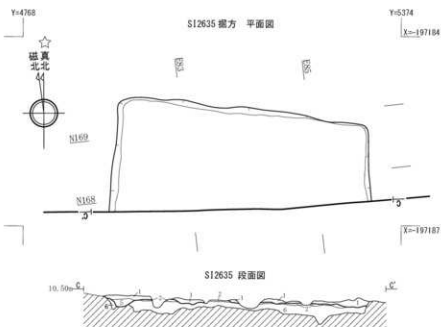
床面施設はカマド及び周溝が検出された。周溝は北壁東半、東壁部分で部分的に確認され、幅 36 cm、深さ 18 cm の規模であり、断面形は U 字状である。

カマドは北壁で検出された。カマド袖部の規模は長さ 72 ～ 110 cm、幅 24 ～ 39 cm、高さ 10 cm を測る。西袖ではカマド母材に用いたと考えられる切石凝灰岩が確認される。切石凝灰岩は長さ 21 cm、幅 18 cm、厚さ 25 cm で、床面から深さ 15 cm の掘方を伴い敷設されており、その後の埋め戻しおよびカマドの構築を同時に行われたと考えられる。燃焼部は幅 84 cm、奥行 69 cm の範囲で焼土が広がり、さらに建物内側へ 18 cm 程の範囲で炭化物の分布が認められる。



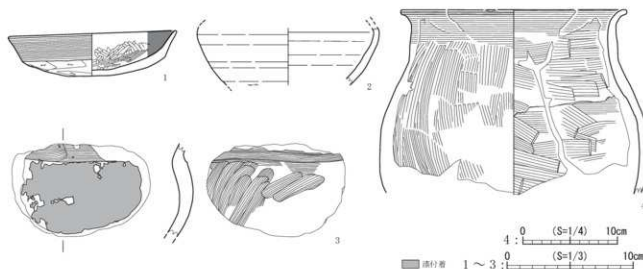
第 12 図 SI2635 竪穴住居跡 床面平面・断面図

II. 第 329 次調査



部位	層位	土色	土質	備考	部位	層位	土色	土質	備考
S12635	1	10YR4/4 褐色	シルト	10YR3/3 粘土を含む。底層内堆積土。	S12635	4a	7.5YR6/6 褐色	シルト	堆土・炭化物多量を含む。燃焼跡。
	2	10YR6/2 灰黄褐色	粘土	10YR8/6 粘土少量含む。貼り床。		4b	7.5YR6/6 明褐色	シルト	堆土・炭化物少量含む。燃焼跡。
	3a	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	炭化物を含む。凝灰岩粒を隅に含む。		5	10YR3/3 暗褐色	シルト	10YR5/6 粘土を含む。段差堆積土。
	3b	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	炭化物を含む。凝灰岩粒を少量含む。		6	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR5/6 粘土質に含む。掘方埋土。

第 13 図 S12635 竪穴住居跡 掘方平面・断面図



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	群種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口徑	底徑	高さ				
1	C-1380	S12635	床面	赤ロクロ土跡器	坪	13.0	11.4	3.4	口縁部：ヨコナデ。体部：ヘラタビ	黒色処理・ヘラミガキ		6-1
2	E-608	S12635	掘方	炭化物	—	—	—	(4.6)	口：ヨコナデ・自然融け付	ロクロナデ	東南産	6-2
3	C-1381	S12635	掘方	赤ロクロ土跡器	鉢	—	—	(7.4)	胴部：ヨコナデ。体部：ヨコナデヘラタビ	胴部：ヨコナデ。体部：調整不明。漆付者	存在地系。漆バレットへの転用品	6-3
4	C-1384	S12635	底層堆積	赤ロクロ土跡器	壺	(24.0)	—	(19.3)	口：ヨコナデ。体部：刷毛目	口：ヨコナデ。体部：ヘラタビ		6-4
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	群種	法量 (cm)			備考			写真図版
—	E-432	S12635	カマド跡	石製品	カマド焼陶材	21.5	18.4	24.8	ノミヤによる既製の加工陶器。硝石凝灰岩			6-5

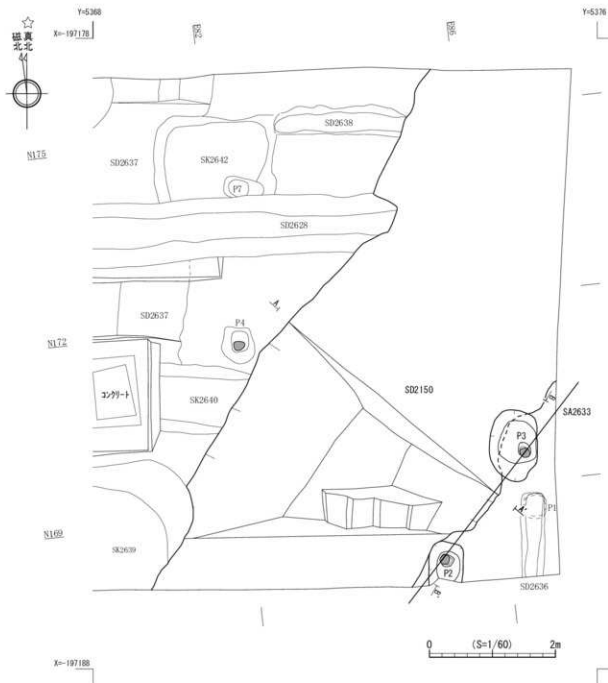
第 14 図 S12635 竪穴住居跡 出土遺物

められる。また、煙道は確認されなかった。掘方底面は比較的平坦であるが、部分的に凹凸が確認される。

遺物は土師器片が184点、須恵器片が22点、カマド構築母材とした切石凝灰岩、器台と考えられる土製品の小片が1点、鉄滓が13点出土した（第14図）。SA2633柱列跡、SD2150溝跡より新しい。

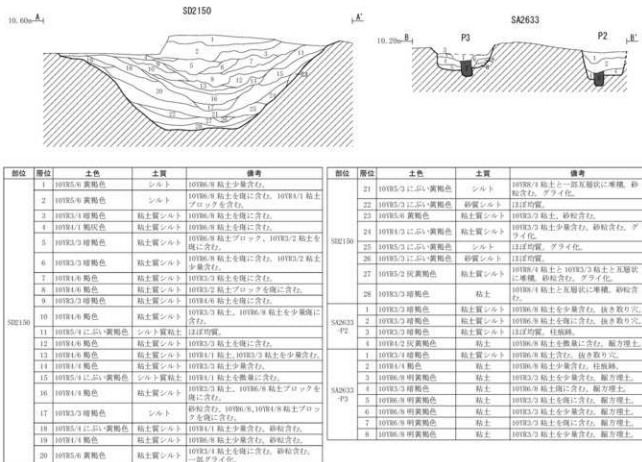
【SA2633柱列跡】（第15・16図）

調査区南東に位置し、IV層上面で検出された北西-南東方向に結ばれる柱列で、P2・3で構成され、調査区外へと続く。方位はN-37.6°-Eで、検出長2.1mである。柱掘方は一辺55～114cmの不整形を呈し、検出面からの深さは37～40cmで、底面は柱痕跡部分が窪んでいる。柱痕跡の直径は17～20cmであり、いずれも柱抜き取り穴を伴う。遺物は土師器片が9点、須恵器片が1点出土した。SI2635堅穴住居跡より新しく、SD2150溝跡より



第15図 SA2633柱列跡・SD2150溝跡平面図

II. 第329次調査



第16図 SA2633 柱列跡・SD2150 溝跡断面図

古い。

【SD2150 溝跡】(第15～17図)

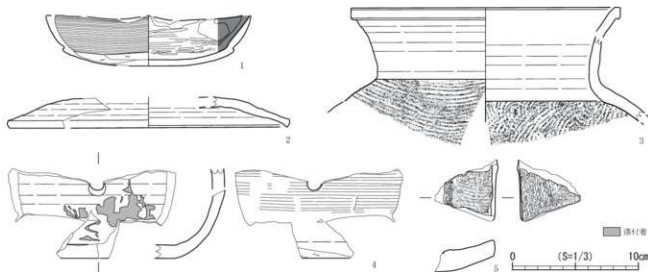
調査区南西に位置し、IV層およびV層上面で検出された。調査区を南西―北東方向に横断する溝跡でその両端は調査区外へ延びる。南西では第171次調査SD2125溝跡、第178・284・285次調査SD2150溝跡と同一の遺構と考えられる。検出長9.5mで方位はN-30.5°～32.0°-Eである。上幅幅427cm、下端幅115cm、深さ152cmで、断面形状は逆台形を呈し、底面は平坦である。堆積土は28層に分層され、下位の18～28層は自然堆積層で、底面近くの27、28層は互層状堆積が確認される。それより上位の1～17層は基本層V層を主体とする粘土ブロックを含み、人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は土師器片が293点、須恵器片32点、鉄片14点が出土した(第17図)。SI2635 竈穴居跡・SA2633 柱列跡・SD2628 溝跡・P8 よりも古い。

【SD2628 溝跡】(第11図)

調査区中央を東西に横断する溝跡で、III層上面で検出されたが本来の掘り込み面はII層上面である。その東側は第320次調査で検出されたSD2628溝跡と同一の遺構と考えられる。検出長12.2mで方位はE-1.4°-Nである。上幅幅137cm、下端幅48cm、深さ58cmで、断面形状は逆台形を呈する。堆積土は3層に分層される。遺物は土師器片58点、須恵器片7点、鉄片1点、陶器片1点、磁器片1点が出土した。SD2150・2637・2634 溝跡・SK2641・2642 土坑・P7・8 より新しい。

【SD2634 溝跡】(第11図)

調査区北西に位置する、南北方向の溝跡の掘り込みで、III層上面で検出された。検出長1.2mで方位はN-11.0°-Eである。上幅幅69cm、下端幅40cm、深さ7cmで、断面形状はU字形を呈する。堆積土は単層で遺物は土師器



図版番号	発掘番号	出土遺構	層位	種類	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	C-1383	SD2150	堆積土	非ロクロ土師器	杯	(17.0)	(5.0)	4.0	口部: ココナダ, 体部: ケズリ	藍色地味・ヘラミガキ		6-5
2	E-693	SD2150	検出面	須恵器	甕	(22.0)	-	(2.3)	口部: ココナダ	口部: ココナダ, 体部: 須恵器		6-6
3	E-694	SD2150	堆積土	須恵器	甕	(21.4)	-	(9.0)	口部: ココナダ, 体部: 平行四角	口部: ココナダ, 体部: 青南波文		6-2
4	E-696	SD2150	堆積土	須恵器	甕	-	(13.2)	(7.1)	ロクロナダ・ヘラミガキ	ロクロナダ・須恵器		7-1

図版番号	発掘番号	出土遺構	層位	種類	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
5	G-181	SD2150	検出面	瓦	平瓦	(8.0)	(7.8)	2.4	前面: 布目肌・横波肌, 凸面: 縄目肌, 側面: ヘラミガキ	7-3

第17図 SD2150 溝跡 出土遺物

片1点が出土した。SK2643 土坑より新しく、SD2628 溝跡より古い。

【SD2636 溝跡】(第11図)

調査区南東に位置し、IV層上面で検出された溝跡で、その南側は調査区外へと延びる。検出長1.3mで方位はN-1.5°-Eである。上幅幅39cm、下端幅17cm、深さ35cmで、断面形状はU字形を呈する。堆積土は3層に分層される。堅穴住居跡に伴う煙道の可能性も考慮したが、堆積土が比較的均質な自然堆積層を主体とすることから溝跡とした。遺物は出土していない。P1より新しい。

【SD2637 溝跡】(第11図)

調査区中央を南北に縦断する溝跡で、その両端は調査区外へと延びる。V層上面で検出された。検出長8.2mで方位はN-10.1°-Eと蛇行している。上幅幅220cm、下端幅55cm、深さ57cmで、断面形状は逆台形を呈する。堆積土は5層に分層され、下面には厚さ10~19cmの砂が集積している。遺物は弥生土器片1点、土師器片51点、須恵器片4点、平瓦1点、鉄滓1点が出土した。SK2639・2640・2642 土坑より古い。

【SD2638 溝跡】(第11図)

調査区北東に位置し、III層上面で検出された溝状の掘り込みである。検出長2.2mで方位はE-0°-Nである。上幅幅33cm、下端幅25cm、深さ6cmで、断面形状は幅広いU字形を呈する。堆積土は単層で、遺物は鉄滓1点が出土した。SD2150 溝跡・SK2642 土坑より新しい。

【SK2639 土坑】(第11図)

調査区南部に位置し、III層上面で北半部が検出され、調査区外の南へ続いている。東西長482cm、南北検出長200cm以上の規模で、平面形状は不明である。深さは50cmあり、底面は凹凸が認められる。堆積土は2層に分層され、最下層は攪拌されていることから、掘り込みではなく、III層の整地に関連する痕跡の可能性もある。遺物は土師器

II. 第329次調査

片が36点、須恵器片が8点、鉄滓5点が出土した。SD2150・2637 溝跡、SX2644 性格不明遺構より新しい。

【SK2640 土坑】(第11・18 図)

調査区中央に位置し、Ⅲ層上面で検出された。西側は攪乱により削平を受けている。東西検出長205 cm以上、南北長119 cmの規模で、平面形状は不明であるが長方形を呈すると考えられる。深さは35 cmであり、底面は比較的平坦である。堆積土は単層で、遺物は土師器片が2点、須恵器片が3点出土した(第18 図4)。SD2150・2637 溝跡より新しい。

【SK2641 土坑】(第11・18 図)

調査区北西に位置し、Ⅴ層上面で検出された。南側はSD2628 溝跡により削平を受けており、北側は調査区外へと続いている。東西長は最大209 cm、南北長190 cm以上で、平面形状は不整形を呈すると考えられる。深さは14 cmで底面は凹凸する。堆積土は単層である。遺物は土師器片が3点、須恵器片が2点出土した(第18 図5)。SD2628 溝跡、P6 より古い。

【SK2642 土坑】(第11 図)

調査区北部に位置し、Ⅲ層上面で検出された。SD2628 溝跡により削平を受けている。東西長188 cm、南北検出長135 cm以上の規模で、平面形状は不明であるが、方形を呈すると考えられる。深さは21 cmで底面は凹凸する。堆積土は単層で、遺物は土師器片が8点、須恵器片が1点出土した。SD2637 溝跡より新しく、SD2628 溝跡、P7 より古い。

【SK2643 土坑】(第11 図)

調査区北西に位置し、Ⅴ層上面で一部検出され、調査区外北西に続いている。東西長100 cm以上、南北長186 cm以上の規模で、平面形状は不明である。検出面より深さは55 cmまで掘り下げたが、壁面に到達したため下端は確認されなかった。堆積土は2層に分層され、遺物は土師器片が4点、鉄滓が2点出土した。SD2628・2634 溝跡より古い。

【SX2644 性格不明遺構】(第11 図)

調査区南西部に位置し、Ⅴ層上面で検出された。東西長100 cm以上、南北長186 cm以上の範囲に不整形に広がる。深さは55 cm以上であり下端は確認されなかった。底面は凹凸が認められる。堆積土は単層で基本層Ⅲ層と類似している。遺物は土師器片が6点、須恵器片が1点、鉄滓が1点出土した。SD2637 溝跡より古い。

【ビット】(第11 図)

SA2633 柱列跡を構成するP2・3のほかにも9基のビットが検出された。直径30～80 cmで、深さ16～41 cmで、このうちP4・5・9で柱痕跡が確認されたが、建物跡を構成するような配置は認められない。遺物は土師器片、須恵器片が出土した。

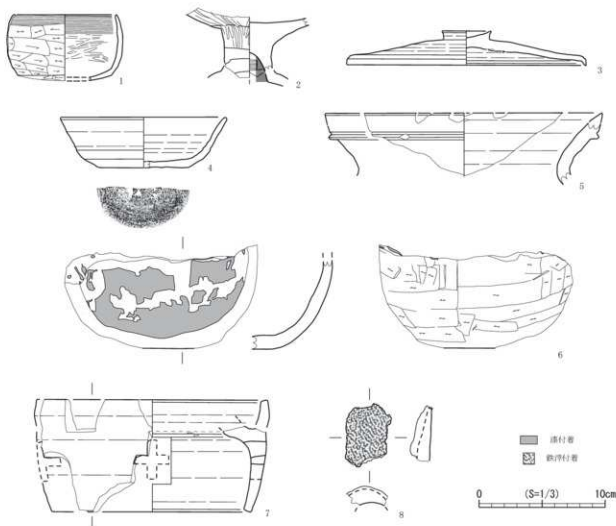
【その他の出土遺物】(第18 図)

基本層Ⅲ層中から弥生土器1点、土師器片423点、須恵器片31点、平瓦3点、鉄滓21点が出土した。また基本層Ⅰ～Ⅲ層上面では土師器片360点、須恵器片30点、平瓦1点、鉄滓8点、羽口1点、陶器1点、磁器5点が出土した。

4. まとめ

調査地点は遺跡北東部に位置し、Ⅰ期官衙においては官衙東辺付近、Ⅱ期官衙においては方四町Ⅱ期官衙の東部にあたり、過去の調査結果から本調査区においてⅠ期官衙東辺区画施設もしくは関連施設の遺構の検出が予想された。発掘調査の結果、堅穴住居跡1軒、柱列1列、溝跡6条、土坑5基、性格不明遺構1基、ビット11基が検出された。

遺構の重複関係および主軸方向からSA2633 柱列跡、SD2150 溝跡がⅠ期官衙、SI2635 堅穴住居跡、SD2637 溝跡



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	C-1379	基本層	Ⅲ	赤ロクロ土 土甕器	甕	(8.2)	(7.6)	6.2	口～ヨコナダ、体部：ヘラケズリ	ナダヘヘラミガキ		7-4
2	C-1382	基本層	Ⅲ	赤ロクロ土 土甕器	高坪	-	-	(15.6)	坪部：ヘラナダ、脚部：ヘラナダ→ヨコナダ	坪部：ヘラミガキ・黒色処理、脚部：ヘラナダ・黒色処理	所在地上部	7-2
3	E-697	基本層	I～Ⅱ	粗息器	甕	(19.0)	-	2.7	口～ロカナダ	口～ロカナダ		7-6
4	E-690	SK2640	I	粗息器	坪	(13.2)	(7.2)	4.0	口～体部：口～ロカナダ、底部：ヘラケズリ	口～底部：口～ロカナダ		7-5
5	E-695	SK2641	堆積土	粗息器	甕	(22.0)	-	(15.6)	口～脚部：口～ロカナダ	口～脚部：口～ロカナダ	一糸安帯	7-7
6	E-692	基本層	Ⅲ	粗息器	甕	-	(15.2)	(8.2)	口～体部：口～ロカナダ→中継ヘラケズリ	口～底部：口～ロカナダ	甕面に漆付着。最上縁バレットに貼用。	7-9
7	E-691	基本層	Ⅲ	粗息器	円面罐	(18.4)	(15.6)	8.9	口～底部：口～ロカナダ	口～ロカナダ・一部ヘラケズリ	十字通かし。(4単位)	7-8
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版		
						長さ	幅	厚さ				
8	F-65	基本層	I～Ⅲ	土製品	羽口	(4.7)	(3.3)	1.5	鉄滓付着。孔径不明。			7-10

第18図 第329次調査 その他の出土遺物

がⅡ期官衙に関連する遺構と考えられる。

SD2150 溝跡はⅠ期官衙の関連施設と考えられ、南側延長において第 171・178・284・285 次調査で検出されており、総長 115 m 以上にわたり続いていることが確認された。上端幅は調査地点によって 4～6 m と一定ではないが、底面は平坦であり下部は水成堆積層である点などは共通している。第 171 次調査区ではこの SD2150 溝跡から西に約 8～13 m 離れてⅠ期官衙東辺の材木列跡が平行しているため、SD2150 溝跡は東辺の外側に位置することになる。本遺構の機能としてはこれまで区画や防御、運河としての機能が想定されている。なお、調査区からは材木列跡と考えられる遺構は検出されていない。また、SD2150 溝跡の東肩に沿うように SA2633 柱列が検出されたが、SD2150 溝跡が埋まってから掘り込まれているため、同時期に機能しない遺構と判断される。

SI2635 堅穴住居跡は残存壁高が約 5 cm と遺存状況は悪いが、住居内施設として周溝及びカマドが確認された。カマドの構築材として角柱状に加工した切石凝灰岩を用いており、隣接する第 320 次調査で検出された 3 軒の堅穴住居跡と同様の規模、構造を持ち、この地区におけるカマド構造の特徴の一端を示している可能性がある。これら遺構の機能については今後も検討が必要であるが、官衙内に位置することから通常の住居とは異なる工房等の機能を有していた可能性がある。また第 320 次調査では近接して堅穴住居跡が検出されることから、数時期の遺構変遷があったと推定され、今後、調査区周辺における堅穴住居跡の広がりについて注視して、この空間における機能について検討していく必要がある。

遺物は漆が付着した土師器甕（第 14 図 3）、須恵器甕（第 17 図 4）、壺（第 18 図 6）が出土した。土師器の甕および須恵器の壺は破面にも漆の付着が確認されることから、漆を使用する際のバレットとして転用されたと考えられる。また、須恵器の甕についても破面が水平になるよう打ち欠かれている可能性があり転用品の可能性もある。これら遺物は出土状況からⅠ期官衙に関連する SD2150 溝跡を埋め戻してから整地を行い、Ⅱ期官衙時に機能する SI2635 堅穴住居跡が造られるまでの時期に埋没したと考えられ、少なくとも SI2635 堅穴住居跡の造営以前の遺物である。調査区から南に約 40 m に位置する第 290 次調査では漆が付着した平瓶と考えられる遺物が出土しており、調査区周辺において漆を使用する作業が行われた可能性がある。



1. 329次調査 調査区全景（西から）



2. SD2150 溝跡（南西から）



3. SD2150 溝跡土層断面（南西から）



4. SI2635 竪穴住居跡床面検出状況（南西から）



5. SI2635 竪穴住居跡カマド断面（南から）



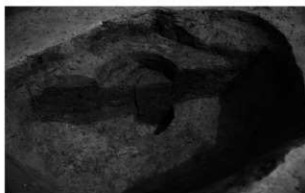
1. S12635 竪穴住居跡遺物出土状況（南東から）



2. SA2633 柱列跡（北東から）



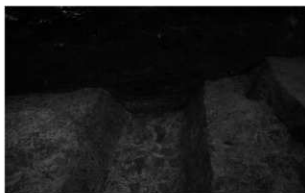
3. SA2633-P2 柱穴土層断面（西から）



4. SA2633-P3 柱穴土層断面（西から）



5. 調査区西半部全景（南から）



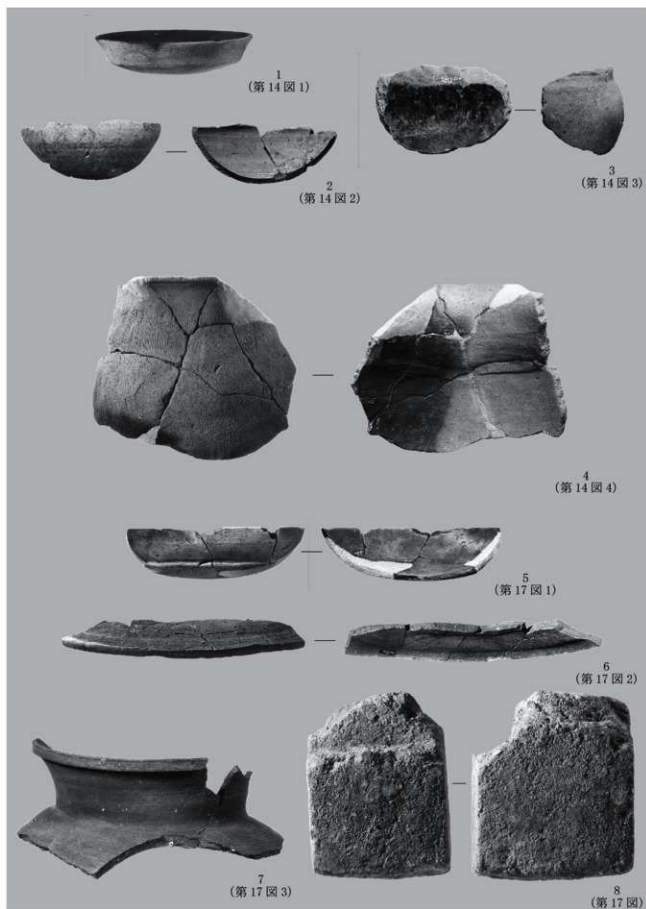
6. SD2637 溝跡土層断面（北から）



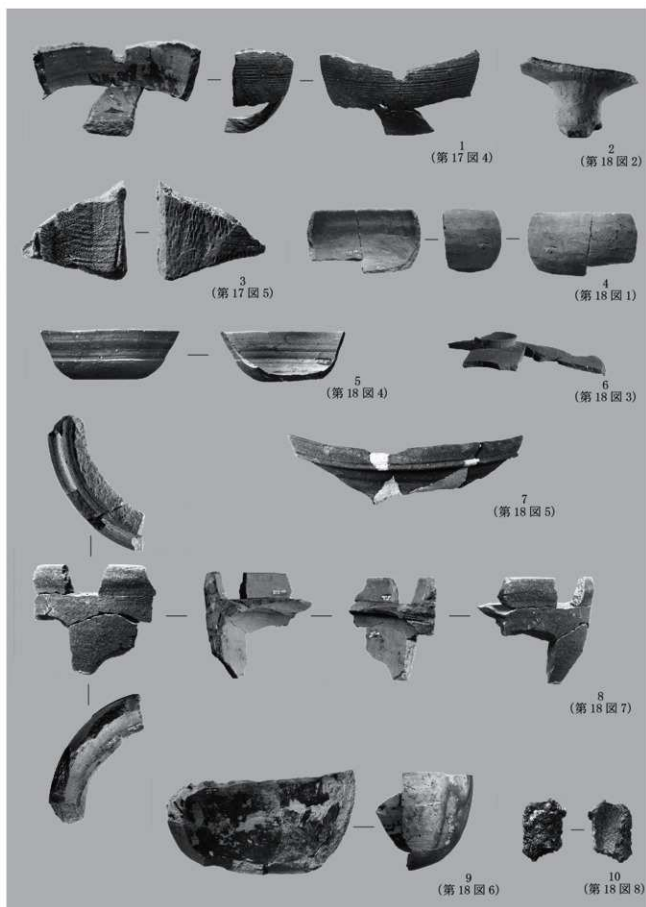
7. SK2639 土抗土層断面（北から）



8. E-692 出土状況（北から）



写真図版6 第329次調査出土遺物(1)

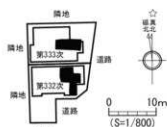


写真図版7 第329次調査出土遺物(2)

Ⅲ. 第332・333次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

第332次調査は令和5年11月2日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和5年11月8日付R5教生文第121-243号で通知）、第333次調査は令和5年11月17日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和5年11月21日付R5教生文第121-264号で通知）に基づき発掘調査を実施した。



第20図 第332・333次調査区配置図

調査の効率的な実施のため、両区画併行しながら調査を実施した。調査は12月1日に着手し、第332次調査は東西4.5m、南北3.5m、第333次調査は東西5.5m、南北2.5mの規模の調査区を設定し、重機により地表から深さ約1.0mまで掘削を行い、基本層Ⅰ層を除去したのち、Ⅱ層上面で精査を行った。調査では各調査区で材木列跡が検出された。材木列跡を検出した後、遺構平面図と建物配置図を照合した結果、建築対象範囲内において第332次調査区南側で材木列跡の延長が検出されることから、12月13日に重機により東西1.5m、南北3mの範囲で調査区を拡張し、調査終了済みの西側の一部を埋め戻した。

なお、本事業において遺構が損なわれる原因が直径200mm、深さ4000～4500mmの柱状改良によるものであるため、検出された材木列跡は原則、布掘り掘方および、材木痕跡の平面プランの把握にとどめ、柱状改良が及び材木痕跡が損なわれる部分に限り断面形状を記録するため、遺構の断割りを実施した。

遺構の記録は遺構平面図および断面図（S=1/20）を作成し、記録写真はデジタルカメラおよびドローンをを用いて撮影した。埋め戻しは12月15日に行い、同日に機材を撤収し調査を終了した。

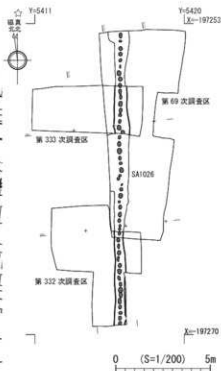
2. 基本層序

調査では、盛土（層厚約0.2m）の下に第69次調査の埋め戻し土および基本層が大別2層細別3層確認された。Ⅰ層は現代の構築土で、一部Ⅱ層を由来とする粘土ブロックを含んでいる。Ⅱ層が古代の遺構検出面であり、地表面までの深さは約1.0mである。

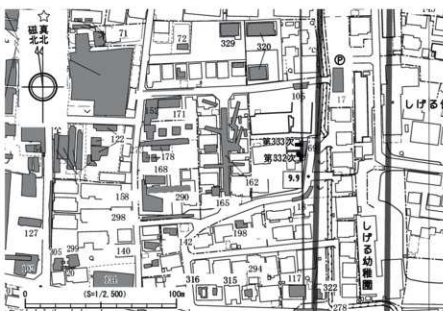
3. 検出された遺構と遺物

第332・333次調査区でそれぞれ同一の材木列跡が1列検出された。

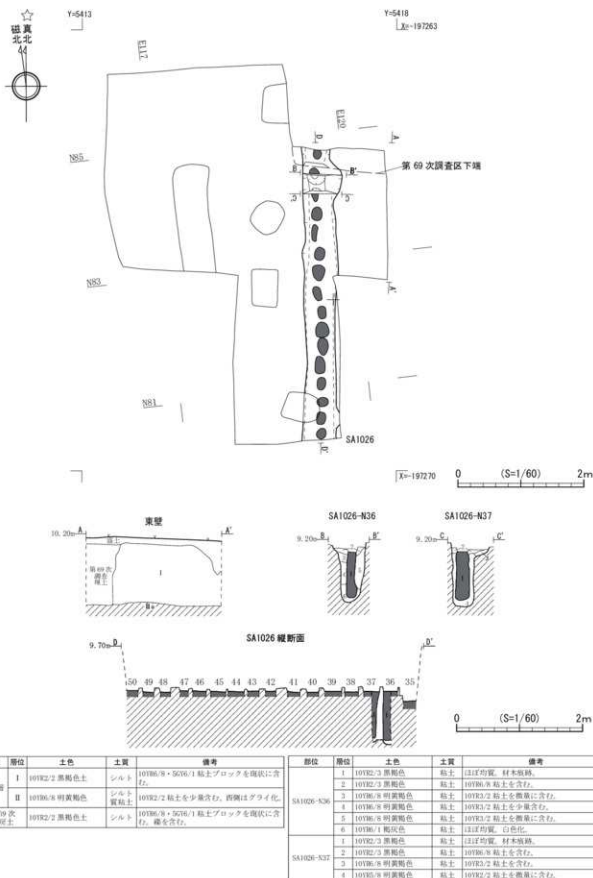
遺物は材木列跡と攪乱から土師器片、須恵器片、平瓦、鉄滓が少量出土した。



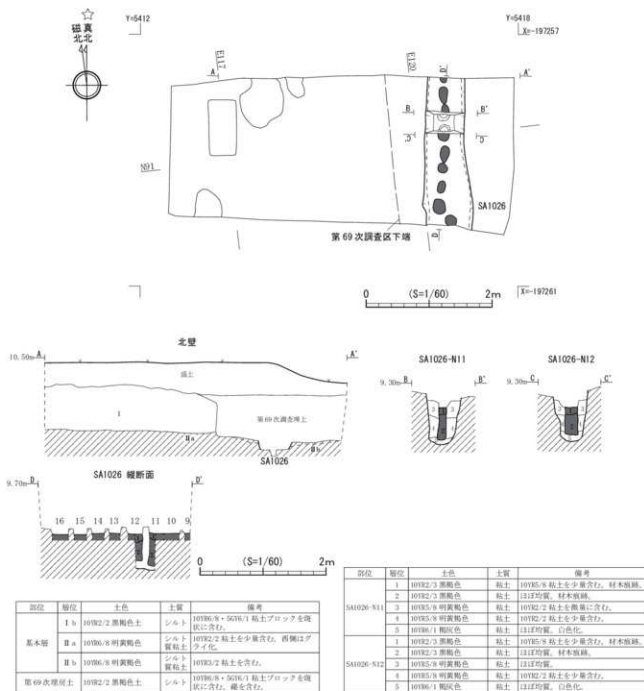
第22図 第332・333次調査
遺構配置図



第21図 第332・333次調査区位置図



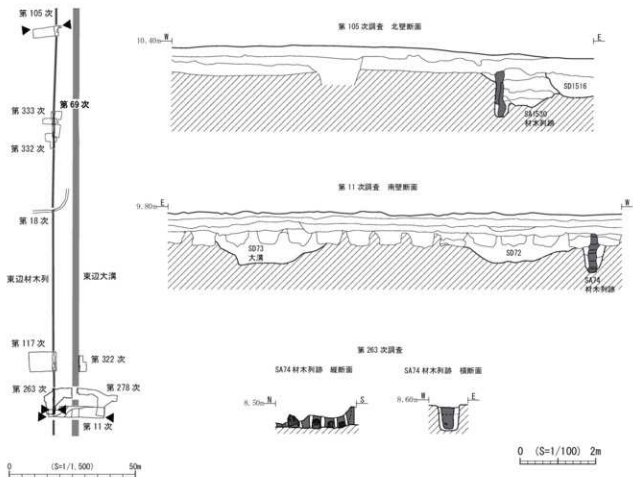
第23図 第332次調査区平面図



第24図 第333次調査区平面図

【SA1026 材木列跡】(第23・24図)

第332・333次調査区でそれぞれ検出され、一部は第69次調査ですでに確認されている。南北方向に延びる布掘り内に材木痕跡が密集して並んでおり、第69次調査を含め50本の材木痕跡を検出した。調査では第69次調査で検出されている材木痕跡を北から順に(N1、N2…N50)と付番した。材木痕跡を結んだ方向は概ねN-0°-Eで真北方向を向く。第332次調査区では検出長456cm、上幅32～55cmの布掘り内にて17箇所材木痕跡が検出され、第333次調査区では検出長237cm、上幅52～75cmの布掘り内にて9箇所材木痕跡が検出された。材木痕跡は直径9～22cmの規模で密接して並んでいる。このうち材木痕跡4本(第332次-N36・37、第333次-N11・12)を対象に2箇所で遺構を半裁し、断面形の把握を行った。布掘り掘方は検出面から深さ86～102cmまで掘り込まれ、北側に比べ、南側の方が深く掘り込まれており、標高で見ると底面の比高差は最大で34cmである。断面形状はU



第25図 第332・333次周辺の方四町Ⅱ期官衙東辺材木列跡の断面

字形を呈し、ほぼ直立に壁が立っている。材木痕跡の底面周囲が窪むように掘り込まれているため、縦断面で見ると底面は凹凸している。掘方埋土は基本層Ⅱ層を基調とした混入物が少ない粘土で埋め戻されており、掘方の壁面に沿うように酸化鉄が集積し、底面の土質は硬化している。また、材木痕跡の周囲の土層は白色化している。遺物は掘方埋土から土師器片17点、須恵器片1点、材木痕跡から土師器片6点、鉄滓1点が出土したが小片のため図化し得なかった。

4. まとめ

調査地点は遺跡東部に位置し、Ⅱ期官衙においては方四町Ⅱ期官衙の東部にあたり、東辺材木列が検出された第69次調査区と一部重複している。

発掘調査の結果、材木列跡1列が検出された。材木列跡は第69次調査を含め総長15.5m、材木痕跡50本分が確認され、その位置や方向から方四町Ⅱ期官衙の東辺を区画する材木列跡と考えられる。調査区周辺における材木列跡の状況は異なっており(第25図)。第105次調査では布掘りの上端に対し、材木痕跡の位置が西に寄っており、掘方形状も西壁際が一段低くなっている。第117次調査では底面まで確認されていないが、布掘りの上端は緩やかに落ちこみ、中段において幅が狭くなる様相が確認されている。その一方で第11・263次調査では布掘り掘方はほぼ直立に壁が立っている。また、第11・263次調査では部分的に礎板状の板材を敷いているのが確認されている。第332・333次調査区では横断面は壁がほぼ直立し、第11・263次調査と類似しているが、第332・333次調査区では、材木痕跡の底面付近が一段窪むように掘り込まれる状況が他の調査区と異なっている。材木列の設置に関しては、その方法について地点ごとに状況が異なる可能性がある。



1. 332・333次調査 調査区全景（上が東）



2. 332次 SA1026 材木列跡検出状況（南東から）



3. 333次 SA1026 材木列跡検出状況（北から）



4. 332次 SA1026 材木列跡 N36 断面（南から）



5. 333次 SA1026 材木列跡 N11 断面（南から）

写真図版 10 第332・333次調査

IV. 第327・330・331次発掘調査

本節では郡山遺跡内で令和5年度に実施された各種開発に伴い実施した小規模調査についてその概要を記す。

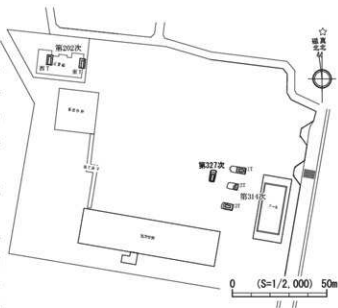
1. 第327次調査

調査経過と調査方法

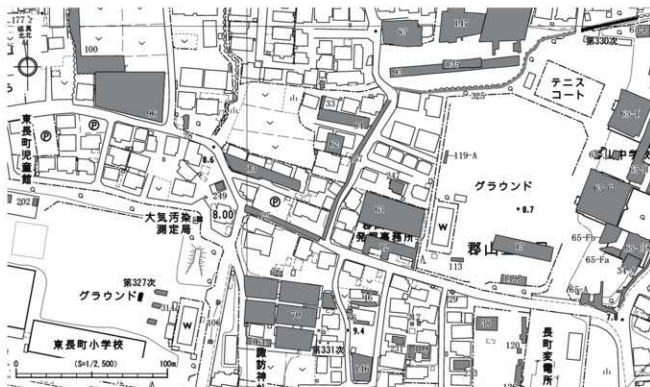
令和4年12月12日付、R4教総施第2413-2号で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の通知について」（令和4年12月15日付R4教生文第106-80号で宮城県へ進達）に基づき実施した。本件は校舎増築の付帯工事に伴うものであり、設備管の新設に伴う掘削範囲を調査対象とした。

調査は4月10日に着手した。調査対象範囲に南北7m、東西3mの規模で調査区を設定した。重機により地表面から約1.0mまで掘削を行ったが、盛土が続いていたため、安全面を考慮し、幅1mの大走を設け南北3.5m、東西1.0mの範囲に狭めてさらに重機掘削を行った。地表面から約1.5mまで掘削した所、基本層Ⅰ層が確認された。基本層Ⅰ層上面で精査を行ったが遺構は検出されなかったため、さらに地表面から約2.0mまで重機により掘削し、土層状況の把握を行った。

遺構の記録は、調査区平面図（S=1/20）および西壁壁面断面図を作成した。記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。記録作業終了後、現場代理人に引き渡しを行い、4月10日に調査を終了した。



第26図 第327次調査区配置図



第27図 第327・330・331次調査区位置図

果、事業者が提案した建築計画が遺構に影響を与える可能性があるかについて確認する目的で、遺構検出面までの深さを確認するための発掘調査を実施した。

調査は11月16日に着手した。建築範囲内に東西1.0m、南北2.5mの調査区を2箇所設定し、重機により盛土を除去した後、人力でI層を除去し、II層上面で精査を行った。調査の結果、今回の建築計画に伴う掘削は盛土内に収まることを確認した。調査の記録は、調査区平面図（S=1/20）および断面柱状図を作成し、記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。記録作業終了後、現場代理人に引き渡しを行い、11月16日に調査を終了した。

調査の概要

調査では厚さ約60cmの盛土の下に基本層が大別2層、細別3層確認された。古代の遺構出面と考えられるII層上面までの深さは0.8～1.1mである。調査地点は郡山廃寺の西辺材木列の推定地に位置するが、今回設定した調査区では遺構は検出されなかった。また、遺物も出土していない。

〈参考文献〉

- 石岡市教育委員会 2009『常陸国衙跡－国庁・曹司の調査－』
 仙台市教育委員会 1986『郡山遺跡VI』仙台市文化財調査報告書第86集
 仙台市教育委員会 1995『郡山遺跡XV』仙台市文化財調査報告書第194集
 仙台市教育委員会 2005『郡山遺跡発掘調査報告書 総括編（1）』仙台市文化財調査報告書第283集
 仙台市教育委員会 2007『郡山遺跡27』仙台市文化財調査報告書第307集
 仙台市教育委員会 2017『郡山遺跡36』仙台市文化財調査報告書第450集
 仙台市教育委員会 2018『杏形遺跡他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第458集
 仙台市教育委員会 2022『郡山遺跡42』仙台市文化財調査報告書第499集
 仙台市教育委員会 2023『郡山遺跡43』仙台市文化財調査報告書第506集
 平岡亮輔・齋藤義彦 2008『郡山遺跡の遺構変遷』第34回古代城柵官衙遺跡検討会－資料集－
 奈良文化財研究所 2010『官衙と門』第13回古代官衙・集落研究会報告書 奈良文化財研究所研究報告第4冊



第30図 第331次土層断面柱状図

第3章 陸奥国分寺跡

1. 第33次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

陸奥国分寺跡は若林区木ノ下に所在する。大正11年(1922)に国史跡となり、発掘調査は昭和30年から34年にかけて陸奥国分寺跡発掘調査委員会により実施され、伽藍中核部の概要が明らかになった。伽藍は南から南大門、中門、金堂、講堂、僧房が一直線上に配置され、中門と金堂は回廊により結び、金堂の東側には回廊が廻る塔跡が配置される東大寺式伽藍であることが分かった。また東・西・南の各辺は築地塀とさらに外側に区画溝が巡っており、東西は築地塀で約242m(約800尺)、南北もそれ以上の規模を持つことが推定されてきた。その後も史跡内の環境整備や各種工事に伴い断続的に発掘調査が実施されている。

史跡地内において令和3年度より未だ確定されていない寺地北辺の区画施設を確認することを目的として発掘調査を実施しており、令和4年度に実施した第32次調査では塀跡等は確認されないが東西方向に延びる比較的規模の大きな溝跡(第32次SD1)が検出されたため、陸奥国分寺跡の仮想北辺区画溝とした。令和5年度は第32次調査SD1溝跡の東側延長を検出し、その詳細を把握することを目的として第33次調査を実施した。

発掘調査は10月11～12日に重機により盛土および旧表土を除去し、翌13日より、遺構検出作業を行った。遺構検出作業の結果、1・2・3区において昨年度の第32次調査で検出された溝跡(32次SD1)の延長が検出されたため、1区は調査区の東西両側を、2区は調査区の東側を重機により拡張した。なお、遺構は完掘せずに保存することを前提とし、半截または一部の掘削に留めた。

その後、2区では北辺の区画溝と築地塀跡と想定される遺構が確認されたため、郡山遺跡・陸奥国分寺跡調査指導委員である永田委員長に11月22日、北野委員に11月27日、吉田委員に11月30日に現地の状況確認および助言を頂いた。12月3日までに調査を終了し、12月3日に遺構の保護のため、土嚢袋およびブルーシートにより上面を保護した上、12月3～4日にかけて重機により埋め戻しを行い、12月4日までにすべての調査を終了した。

調査区は第32次調査で検出された東西方向に延びる溝跡を陸奥国分寺跡の北辺区画溝と仮定し、その東側延長上の4箇所調査区を設定した。陸奥国分寺跡の南大門および南辺築地塀から北に約270～280mの地点である。

遺構の記録は平面・断面図をS=1/20で作成し、記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。

2. 基本層序

1～3区で基本層を大別4層確認した。Ⅰ層は現代の旧耕作土および旧宅地造成土であり、Ⅱ層は黒ボク土で、陸奥国分寺跡本来の遺構検出面と考えられるが、いずれの調査区でも大部分が削平を受けており、部分的にのみ確認された。Ⅲ層は暗褐色・褐色・黄褐色粘土を主体とする基盤層でこの上面で遺構検出作業を行った。Ⅳ層は砂礫層である。

なお、4区では地表面から深さ約2.5m以上の攪乱が及んでおり、基本層は確認されなかった。

3. 検出遺構と出土遺物

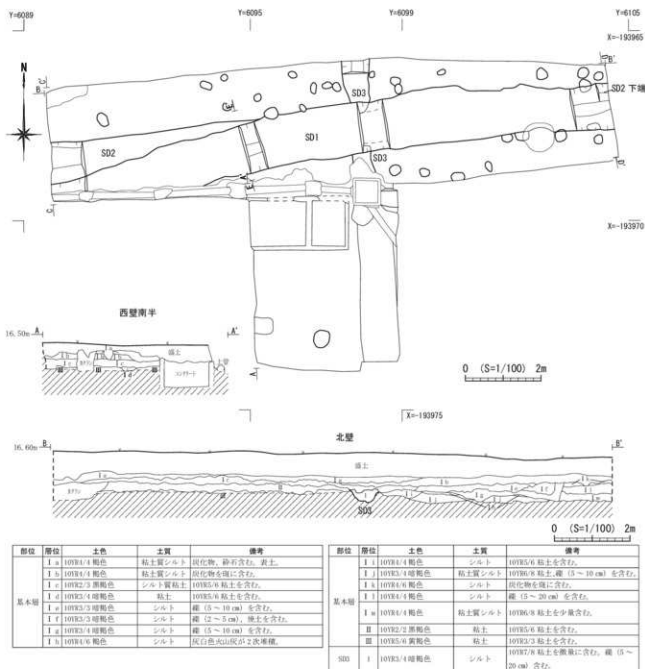
1区の検出遺構

1区では地表面から30～100cm下(標高約15.4m)のⅢ層上面で溝跡3条とビット29基を検出した。遺物は遺構および基本層から土師器、須恵器、丸瓦、平瓦が出土した。

【SD1 溝跡】(第32・33・37・38 図)

東西方向の溝跡であり、検出長15.0mで、その両端は調査区外へと延びる。溝跡北辺でみた方位はE-5.67°～17.14°-Nと蛇行している。規模は箇所により削平を受けており、一定ではないが、上幅115cm、下幅25～35cm、深さ44cmで、断面は逆台形状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は西壁、中央ベルト、東壁で各

I. 第33次調査



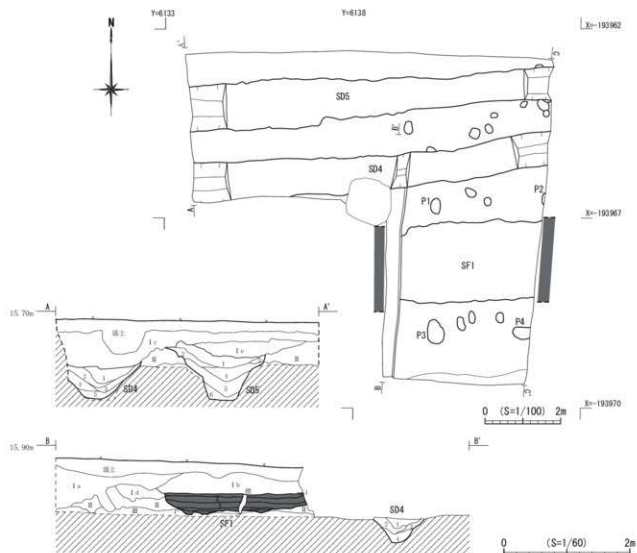
第32図 第33次調査 1区平面・断面図

3層に分層される。中央ベルトおよび東壁では堆積状況から掘り直し（中央ベルト1～2層、東壁1～2層）の可能性も考えられ、地点により掘り直しが行われている可能性がある。遺物は土師器が15点、須恵器が2点、丸瓦が14点、平瓦が25点出土している。遺物は土師器が16点、須恵器が2点、丸瓦が4点、平瓦が34点出土し、このうち軒丸瓦（第37図4）、軒平瓦（第37図6）、平瓦（第38図2～4・6・7）、道具瓦（第37図2）を掲載した。SD2・3溝跡より新しい。

【SD2 溝跡】（第32・33図）

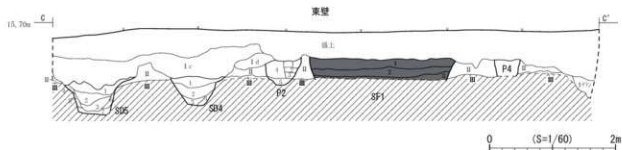
東西方向の溝跡であり、検出長14.8mで、その両端は調査区外へと延びる。遺構の詳細については、その大部分がSD1溝跡と重複しているため明確でないが、調査区東壁では北側の下端が確認されることから、北側の上端はSD1溝跡の上端とほぼ同位置であったと考えられる。北側の下端でみた方位はE-5.5°-Nでやや北に触れる。規模は上幅96cm、下幅55cm、深さ50cmである。底面は平坦で、壁面は底面から25～30cm程は直立気味に立ち

I. 第33次調査



部位	層位	土色	土質	備考	部位	層位	土色	土質	備考
基本層	I a	10YR4/4 褐色	シルト	礫 (10 ~ 20 cm) を含む。	SF1 (B-B')	1	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/6 粘土、10YR2/3 粘土塊に含み、版築状に準様。
	I b	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	砂粒含む。		2	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR5/6 粘土、10YR2/3 粘土塊に含み、版築状に準様。
	I c	10YR4/4 褐色	シルト	10YR7/8 粘土、10YR2/2 粘土ブロック、礫 (2 ~ 5 cm) を塊に含む。		3	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/6 粘土、10YR2/3 粘土塊に含み、版築状に準様。
	I d	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	10YR7/8 粘土、10YR2/2 粘土ブロックを多量に含む。		4	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR5/6 粘土、10YR2/3 粘土塊に含み、版築状に準様。
	I e	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	10YR7/8 粘土を少量含む。		5	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR5/6 粘土、10YR2/3 粘土を塊に含む。
	II	10YR2/3 黒褐色	粘土	10YR5/6 粘土を少量含む。	SD4 (B-B')	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR6/8 粘土、10YR3/2 粘土少量含む。
	III	10YR5/6 黄褐色	粘土	10YR2/3 粘土を塊に含む。		2	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR6/8 粘土、礫 (2 ~ 5 cm) 少量含む。
	SD4 (A-A')	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト		3	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR7/8 粘土少量含む。
		2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト		4	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR6/8 粘土を塊に含む。
		3	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト					
		4	10YR4/6 褐色	シルト質粘土					
		5	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土					
SD5 (A-A')	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	ほぼ均質。					
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR7/8 粘土を微量に含む。礫 (5 ~ 20 cm) を含む。					
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR7/8 粘土を塊に含む。					
	4	10YR6/8 明黄褐色	粘土質シルト	10YR3/2 粘土を塊に含む。					

第34図 第33次調査 2区平面・断面図



部位	層位	土色	土質	備考	部位	層位	土色	土質	備考
SD4 (C-C')	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR6/8 粘土、10YR3/2 粘土少量含む。	SF1 (C-C')	1	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR5/6 粘土ブロックを塊に含み、版築的に堆積。
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR6/8 粘土、礫 (2~5cm) 少量含む。		2	10YR2/1 黒色	シルト質粘土	10YR5/6 粘土ブロックを塊に含み、版築的に堆積。
	3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR6/8 粘土を塊に含む。		3	10YR2/1 黒色	シルト質粘土	10YR5/6 粘土ブロックを塊に含み、版築的に堆積。
	4	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	10YR6/8 粘土少量含む。		1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR7/8 粘土ブロックを塊に含む。
SD5 (C-C')	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR4/4 粘土少量含む。	P1	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR7/8 粘土を少量含む。
	2	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	10YR4/4 粘土少量含む。		3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR7/8 粘土を少量含む。
	3	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	10YR6/8 粘土を含む。		4	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR7/8 粘土を少量含む。
	4	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR4/4 粘土を含む。		5	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR7/8 粘土ブロックを塊に含む。
	5	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR6/8 粘土ブロックを含む。	P2	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR4/6 粘土を少量含む。
	6	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR6/8 粘土ブロックを少量含む。					
	7	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR6/8 粘土ブロックを少量含む。					

第35図 第33次調査 2区断面図

° - N でやや北に触れる。幅 229 cm、深さ 30 cm の掘り込みに黒褐色粘土、暗褐色粘土、黄褐色粘土を主体とした厚さ 4 ~ 10 cm の版築層が検出された。主体となる粘土の色調により西側では 5 層に分層したが、各層はさらに 2 ~ 3 単位の積み上げが確認される。遺物は出土していない。

【SD4 溝跡】(第 34・35・37・38 図)

東西方向の溝跡であり、検出長 9.5m で、その両端は調査区外へと延びる。溝跡の芯々での方位は E - 3.49 ~ 9.6° - N でやや北に触れ、直線的でなく蛇行している。規模は箇所により削平を受けており、一定ではないが、上幅 86 cm、下幅 25 ~ 34 cm、深さ 45 ~ 51 cm で、断面は逆台形状で壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は西壁で 5 層、東壁で 4 層に分層され、西壁では堆積状況から掘り直し (西壁 1 ~ 3 層) の可能性も考えられ、地点により掘り直しが行われている可能性がある。遺物は土師器が 15 点、須恵器が 2 点、丸瓦が 14 点、平瓦が 25 点出土している。このうち丸瓦 (第 37 図 5、写真図版 12 - 5)、平瓦 (第 38 図 5) を掲載した。

【SD5 溝跡】(第 34・35・37 図)

東西方向の溝跡であり、検出長 9.5m で、その両端は調査区外へと延びる。溝跡の芯々での方位は E - 3.8° - N でやや北に触れる。規模は西側に比べ東側の方がより削平を受けているため一定ではないが、上幅 114 ~ 127 cm、下幅 42 ~ 50 cm、深さ 64 ~ 82 cm である。底面は平坦で、壁面は底面から 40 cm 程は直立気味に立ち上がり、それ以上は緩やかに外傾している。堆積土は西壁で 6 層、東壁で 7 層に分層され、東壁では堆積状況から掘り直し (東壁 1 ~ 3 層) の可能性も考えられ、地点により掘り直しが行われている可能性がある。遺物は軒丸瓦が 1 点出土している (第 37 図 3)。

【ピット】(第 34 図)

19 基検出されたが、いずれも柱痕跡は確認されない。調査では平面形状の把握に留め、掘削していない。直径 15 ~ 46 cm で円形を基調とする。このうち P1・3 は SF1 築地跡跡を挟み、直行するように配置されている。P1 は SF1 北端から 45 cm、P3 は SF1 南端から 76 cm に位置し、2 基は約 3.4 m 離れている。また、P2 も P1 と同様に SF1

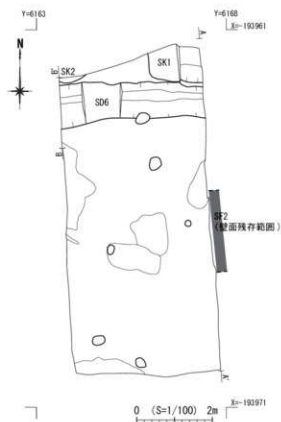
北端より49 cmで、P1との間隔約3mに位置している。これらは築地塀の掘り込み地業外側に位置する可能性が高いことから、寄柱の柱穴にはならないが、何らかの関連遺構の可能性はある。また遺物は出土していない。

3区の検出遺構と出土遺物

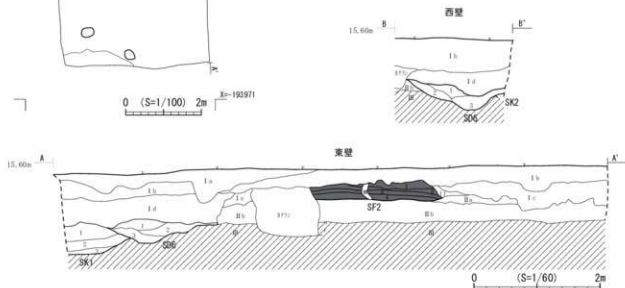
3区では地表面から約50 cm下のⅡ層上面(標高約14.9m)では攪乱が著しく遺構検出が困難であったため、約80 cm下のⅢ層上面(標高約14.6m)まで掘り下げ、溝跡1条と土坑2基、ピット5基を検出し、東壁壁面にてSF2築地塀跡を検出した。また、遺物は遺構および基本層から土師器、丸瓦、平瓦が出土した。

【SF2 築地塀跡】(第36図)

調査区東壁面にて検出された版築状の堆積が確認される掘り込みである。検出幅209 cmで、北側は攪乱に削平され、南側では立ち上がりが確認されるが上端は削平されている。深さ33 cmの掘り込みに黒褐色粘土、褐色粘土、黄褐色粘土を主体とした2～14 cmの版築層が検出された。主体となる粘土の色調により4層に分層したが、各層においてさらに2～3単位の積み上げが確認される。遺物は出土していない。



部位	層位	土色	土質	備考
基本層	I a	10YR4/1 褐色	シルト	砂粒、砂を含む。黄土。
	I b	10YR4/1 褐色	粘土質シルト	炭化物を塊に含む。
	I c	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR2/8 シルトブロックを少量含む。
	I d	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭、炭化物を少量含む。
	I e	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR2/8 シルトブロックを塊に含む。
	I f	10YR2/2 黒褐色	粘土	10YR5/8 粘土、10YR4/6 粘土ブロックを塊に含む。
	II a	10YR2/2 黒褐色	粘土	10YR2/8 シルトを散在に含む。
	II b	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR2/8 シルトを散在に含む。
	III	10YR4/6 褐色	粘土	10YR2/2 粘土を塊に含む。
	IV	10YR6/8 黄褐色	砂粘層	層(20～20 cm)の最も上に含む。
SF2	1	10YR5/8 黄褐色	粘土	10YR4/6 粘土、10YR2/2 粘土と散在状に堆積。
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR4/6 粘土、10YR2/2 粘土と散在状に堆積。
	3	10YR5/8 黄褐色	粘土	10YR4/6 粘土、10YR2/2 粘土と散在状に堆積。
	4	10YR4/6 褐色	粘土	10YR2/2 粘土と互層状に堆積。
SD6	1	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	ほぼ均質。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	10YR2/8 粘土を散在に含む。
	3	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	10YR2/8 粘土を少量含む。
SK1	1	10YR4/1 褐色	粘土質シルト	10YR2/8 粘土ブロックを塊に含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	10YR2/8 粘土ブロックを塊に含む。
	3	10YR4/1 褐色	粘土質シルト	10YR2/8 粘土を少量含む。
SK2	1	10YR3/1 黒褐色	粘土	炭を少量含む。



第36図 第33次調査 3区平面・断面図

【SD6 溝跡】(第36・38図)

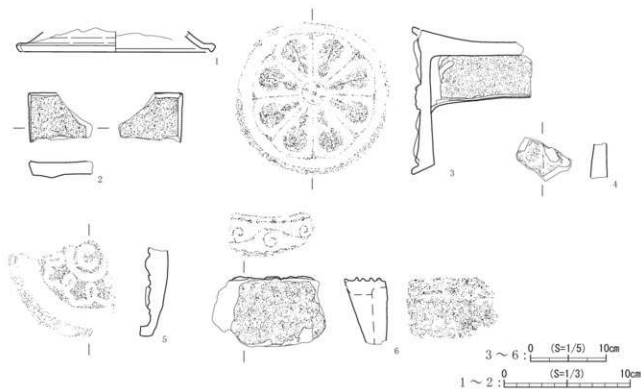
東西方向の溝跡で、検出長 3.8m であり、その両端は調査区外へと延びる。溝跡の芯々の方位は E-1.95° - N でやや北に振れている。上幅 115cm、下幅 30cm、深さ 42cm で、壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は 3 層に分層される。遺物は土師器が 2 点、丸瓦が 12 点、平瓦が 5 点出土した。このうち丸瓦(第38図1)を掲載した。SK1・2 土坑より新しい。

【SK1 土坑】(第36図)

調査区北東で一部検出され、調査区外へと続いている。東西検出長 75cm 以上、南北検出長 15cm 以上で平面形状は不明である。深さは 49cm であり、堆積土は 3 層に分層される。遺物は丸瓦が 2 点出土した。SD6 溝跡より古い。

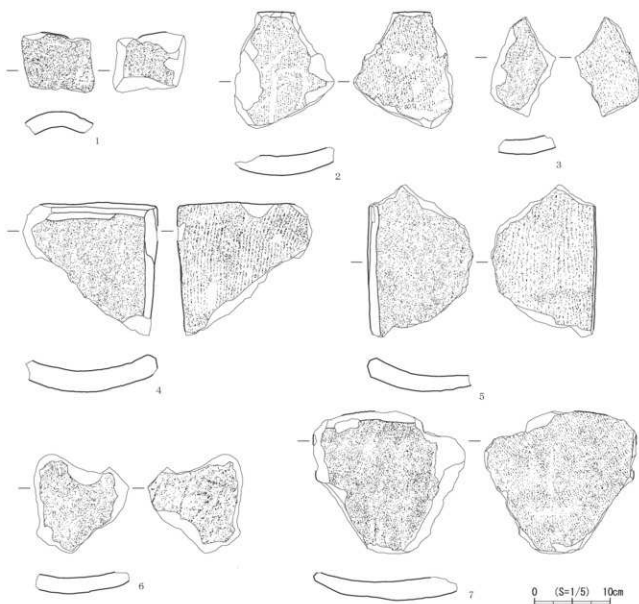
【SK2 土坑】(第36図)

調査区北西で一部検出され、調査区外へと続いている。東西検出長 137cm 以上、南北検出長 100cm 以上で平面形状は不明である。検出面より深さ 8cm の掘削に留めており、堆積土は 1 層確認された。遺物は出土していない。SD6 溝跡より古い。



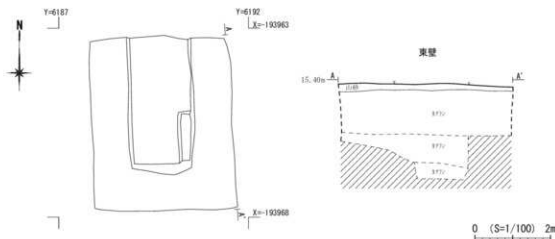
第37図 第33次調査出土遺物(1)

I. 第33次調査



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種類	器種	備考	写真図版
1	F-5	3区-SB	横出上面	瓦	丸瓦	長さ (7.0) cm, 幅 (6.0) cm, 厚さ 2.1 cm, 凸面: ケズリ, 周印「点」, 凹面: 布目痕・磨耗著しい	12-6
2	G-2	1区-SB1	横出上面	瓦	平瓦	長さ (15.4) cm, 幅 (13.1) cm, 厚さ 2.6 cm 凹面: 布目痕・磨耗著しい, 凸面: 縄印き, 側面: 不明	12-11
3	G-3	1区-SB1	横出上面	瓦	平瓦	長さ (13.1) cm, 幅 (7.0) cm, 厚さ 2.1 cm 凹面: 布目痕・磨耗著しい, 凸面: 縄印き	12-13
4	G-6	1区-SB1	横出上面	瓦	平瓦	長さ (17.2) cm, 幅 (18.0) cm, 厚さ 2.8 cm 凹面: 布目痕→ヘラナデ, 凸面: 縄印き, 側面: ケズリ	12-8
5	G-5	2区-SB1	横出上面	瓦	平瓦	長さ (18.7) cm, 幅 (12.3) cm, 厚さ 2.3 cm 凹面: 布目痕→布切り痕, 凸面: 縄印き, 側面: ケズリ	12-12
6	G-4	1区-SB1	中央ヘルト	瓦	平瓦	長さ (12.3) cm, 幅 (12.0) cm, 厚さ 2.1 cm 凹面: 布目痕, 凸面: 縄印き→格子印き (稲妻状)	12-14
7	G-7	1区-SB1	横出上面	瓦	平瓦	長さ (18.0) cm, 幅 (20.0) cm, 厚さ 1.3~2.6 cm 凹面: 布目痕→ナデ, 凸面: 縄印き, 側面: ヘラケズリ, 縁部湾曲した の遺残見か?	12-10

第38図 第33次調査出土遺物(2)



第39図 第33次調査 4区平面・断面図

【ビット】

5基検出されたが、いずれも柱痕跡は確認されず、施設等を構成する配置も確認されない。調査では平面形状の把握に留め、掘削していない。直径15～46cmで円形を基調とする。遺物は出土していない。

4区の検出遺構と出土遺物

4区では地表面から約250cmの深さ（標高12.9m）まで掘削したが、現代のガラス、陶器片を含む攪乱が及んでいることを確認した。周辺の調査結果や地形から遺構検出面は削平されている可能性が高いと判断される（第39図）。また、遺物は盛土中から平瓦が1点出土した。

4. まとめ

陸奥国分寺跡の北辺施設の検出を目的として調査を行った。調査の結果、1～3区の各調査区で東西方向の溝跡、築地塀跡、ビットが検出された。このうち東西方向の溝跡および築地塀跡は何らかの区画施設と考えられ、各調査区で検出された遺構はその規模や位置関係、断面形状と堆積土の類似性により、その関係は以下のように整理される（第40図）。

築地塀跡	—	SF1 (2区)・SF2 (3区)	—	(仮) 北辺築地塀
溝跡1	—	SD1 (1区)・SD4 (2区)・SD6 (3区)	—	後世の区画溝
溝跡2	—	SD2 (1区)・SD5 (2区)	—	(仮) 北辺区画溝

築地塀跡は2区(SF1)と3区(SF2)で部分的に検出された。上部構造は確認されないが、版築層を伴う東西方向に結ばれる掘り込みが確認されることから、築地塀に伴う掘り込み地築跡と判断した。掘り込み地築は基本層Ⅱ層上面で掘り込まれており、1区南側ではⅡ層が確認されないことから、1区ではその痕跡が削平されている可能性がある。2区の掘り込み南辺でみた方位は $E-3.8^{\circ}-N$ で、2区と3区の掘り込み南辺を結んだ方位がおよそ $E-4^{\circ}-N$ であることから、ほぼ直線的に延びると推定される。なお、版築層の構成土は周辺の地山層（黒色・黒褐色粘土—Ⅱ層、暗褐色・褐色・黄褐色粘土—Ⅲ層）を主体として、それらを叩き締めていると考えられる。また、2区ではビットの配置から何らかの関連作業の痕跡と考えられるものが検出された。

溝跡1は1区(SD1)、2区(SD4)、3区(SD6)で検出された。また、その位置関係と堆積土の類似性により第27次5TのSD31、第32次のSD1、第28次6TのSD56と同一の溝跡で、第28次7TのSD69と同一の可能性もある。上幅は最大115cmで、壁面は緩やかに立ち上がり、底面は地点によって比較的平坦であったり、窪んだり異なる。また、地点によっては掘り直されている可能性がある。堆積土は比較的均質な自然堆積土である。調査当初は本遺

構を北辺区画溝と想定していたが、調査の結果、①溝跡の方向が一定ではなく蛇行すること、②1区周辺においては(仮)北辺築地塀の推定延長上に位置し重複すること、③本遺構より古い溝跡2が存在することから、創建時の陸奥国分寺に伴わない、後世に開削された区画溝と判断される。しかし、現段階ではその開削・埋没年代について詳細は不明である。

溝跡2はSD2(1区)・SD5(2区)で検出された。また、その位置関係と断面形状の類似性により第28次6TのSD62と同一の溝跡で、第28次7TのSD68と同一の可能性がある。上幅は最大で127cmで、底面は平坦に掘り込まれ、底面近くの壁面は直立気味に立ち上がる。堆積土は粘土ブロックを含んでおり、最終的には埋戻されている可能性がある。また、地点により掘り直しが行われ、一定期間維持されていた可能性がある。1区でE-5.5°-N、2区でE-3.8°-N、1区と2区を結んだ方位はおおよそE-5°-Nであり、地点によりやや異なるがほぼ直線的に延びており、築地塀跡と平行すると考えられる。

以上を整理すると、築地塀跡と溝跡2が陸奥国分寺跡の北辺築地塀および北辺区画溝の可能性があると考えられる。これら遺構の配置関係を整理すると、2区で見ると築地塀跡(SF1)北辺と溝跡2(SD5)の中心は約3.4m離れており、南辺区画溝と溝跡2(SD5)との距離は約274m、南辺築地塀と堀込地業跡(SF1)中心までの距離は約267mである(註1)。

また、4区は(仮)北辺築地塀の延長上に位置し、これまでの調査から東辺築地塀の推定延長上に位置することから、調査区周辺に築地塀の北東隅が位置していた可能性があるが、遺構は掘乱によって壊されている可能性が高い。

今後、これらの遺構が北辺区画施設であることを検証するための課題として、より平面的に築地塀のプランを確認すること、北門の存在を確認すること等が挙げられる。築地塀の平面的なプランを確認するためには本調査2・3区周辺での調査の実施が求められる。また、北門の位置については南大門、中門、金堂、講堂中心を結んだ推定中軸線の延長と、(仮)北辺築地塀の延長ラインから、第27次調査の5区および第32次調査区周辺に位置している可能性があり、過去の調査で検出されないことから北門の痕跡は削平されている可能性も考えられる。そのため、推定中軸線付近の北辺区画溝と遺構の配置状況を確認することで北門の位置を検証することが求められる。

(註1) 既往調査から正確な座標値が不明であるため、中軸線の傾きについて算出できないが、第28次調査における南辺の築地塀跡および区画溝跡の調査によって南辺の傾きがおおよそE-4°20'~40'-Nであることが分かっている(仙台市教育委員会2009)。そのため、遺構間の距離を計測するにあたり、南辺の傾きを90°振ったN-4°30'-Wをおおよその中軸線と仮定し距離を算出した。

〈参考文献〉

- 仙台市教育委員会1981『史跡陸奥国分寺跡 昭和55年度環境整備予備調査外報 東門跡』仙台市文化財調査報告書第27集
- 仙台市教育委員会1990『仙台平野の遺跡群IX』仙台市文化財調査報告書第134集
- 仙台市教育委員会2007『陸奥国分寺跡』『郡山遺跡27』仙台市文化財調査報告書第307集
- 仙台市教育委員会2008『陸奥国分寺跡第28次調査』『仙台平野の遺跡群XVIII』仙台市文化財調査報告書第328集
- 仙台市教育委員会2009『陸奥国分寺跡第29次調査』『郡山遺跡29』仙台市文化財調査報告書第347集
- 陸奥国分寺跡発掘調査委員会1961『陸奥国分寺跡』



第40図 陸奥国分寺跡北東部の調査区と検出遺構

I. 第33次調査



1. 第33次調査 調査区遠景（南西から）



2. 1区 調査区全景（上が北）

写真図版9 陸奥国分寺跡第33次調査（1）



1. 1区 SD1・2 溝跡 (西から)



2. 1区 SD1・2 溝跡 中央ベルト断面 (東から)



3. 1区 SD1・2 溝跡 西壁断面 (東から)



4. 1区 SD1・2 溝跡 東壁断面 (西から)



5. 2区 調査区全景 (東から)



1. 2区 SD4・5溝跡（東から）



2. 2区 SD4・5溝跡 西壁断面（東から）



3. 2区 SF1築地塀跡（東から）



4. 2区 SF1築地塀跡 掘り込み地業断面（東から）



5. 3区 調査区全景（上が北）



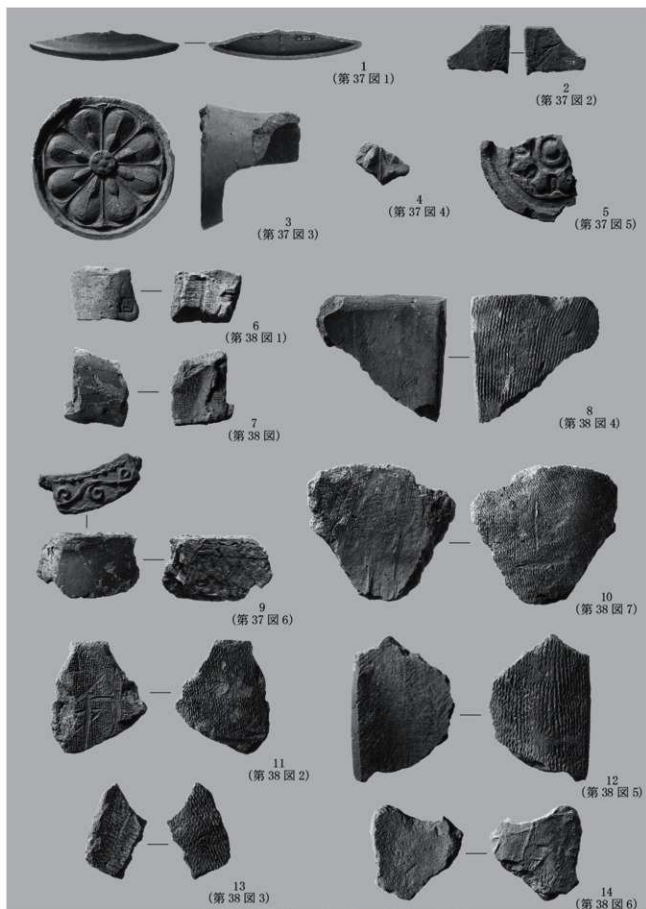
6. 3区 SD6溝跡 西壁壁面（東から）



7. 3区 東壁断面（西から）



8. 4区 調査区全景（北西から）



写真図版 12 陸奥国分寺跡第33次調査出土遺物

第4章 調査成果の普及と関連活動

郡山遺跡・陸奥国分寺跡の調査成果の普及活動について、以下の通り実施した。

1. 郡山中学校ピロティ見学

年月日	対 象 者
5.15	個人
9.13	市民文化財研究員
11.22	加茂社会学級
3.12	太白区まちづくり推進課
3.14	横浜古代史を学ぶ会



ピロティ案内の様子

2. 出前講座・出前授業

内 容	対 象 者 (実 施 日)
陸奥国分寺の成り立ちについて	国分寺名水と歴史的景観を守る会 (4.20)
陸奥国分寺について	せんだい豊齢学園 (6.2)
陸奥国分寺ができたころの仙台	連坊オモシロ街歩き会 (7.2)
史跡陸奥国分寺・尼寺跡の歴史	若林区中央市民センター 老社大学 (7.12)、 太白区中央市民センター (7.13)、 生涯学習支援センター (8.16)
郡山遺跡を知る・歩く	郡山老人福祉センター (9.12, 10.24)
陸奥国分寺フィールドワーク	連坊小路小学校4学年 (7.3)



講座の様子

3. 資料調査・貸出・見学

内容	申 請 者
ガイド施設・天平廻廊写真データ	(株) コミュニティ新聞社
郡山遺跡出土遺物 28 点	宮城学院女子大学
郡山遺跡・陸奥国分寺跡写真データ	(株) 敬文社
郡山遺跡写真データ	地底の森ミュージアム
郡山遺跡出土遺物 39 点	個人
郡山遺跡 軒平瓦 1 点	個人
陸奥国分寺跡写真データ	(株) 岩波書店
郡山遺跡 土師器杯 (関東系)	東北歴史博物館



史跡地内での植栽活動

4. 主催・連携事業

年月日	内 容	対 象 者	備 考
6 月	史跡陸奥国分寺・尼寺跡ガイド施設来館者 6 万人達成イベント	一般公開	講座、ガイドを実施
7 月	郡山遺跡史跡地整備 (植栽)	東長町小 6 学年 児童 郡山中学校ボランティア委員 生徒	約 150 名
11.11	第 78 回文化財展活動報告会	文化財サポーター会、陸奥国分寺薬師堂ガイドボランティア会、仙台城ボランティア会、聖和学園研修部	
通年	陸奥国分寺・尼寺跡ガイド研修および清掃活動	聖和学園高等学校研修部 生徒	
通年	陸奥国分寺跡ガイド	陸奥国分寺薬師堂ボランティア会	

報告書抄録

ふりがな	こおりやまいせき
番名	郡山道跡 44
副番名	令和 5 年度発掘調査概報 郡山道跡・陸奥国分寺跡
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 516 集
編著者名	妹尾一樹 瀬江洋介
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒 980-0011 仙台市青葉区上杉一丁目 5-12 仙台市役所 上杉分庁舎 10 階 TEL : 022-214-8893
発行年月日	令和 6 年 3 月 29 日

所収道跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道跡番号					
こおりやまいせき 郡山道跡 (第 327 次)	宮城県仙台市太白区 郡山六丁目	04104	01003	38° 13' 09"	140° 53' 23"	2023. 4. 10	約 17 m ²	記録保存 (校舎増築付帯工事)
こおりやまいせき 郡山道跡 (第 328 次)	宮城県仙台市太白区 郡山三丁目	04104	01003	38° 13' 21"	140° 53' 33"	2023. 6. 19 ~ 2023. 9. 15	約 225 m ²	保存目的
こおりやまいせき 郡山道跡 (第 329 次)	宮城県仙台市太白区 郡山三丁目	04104	01003	38° 13' 25"	140° 53' 41"	2023. 5. 9 ~ 2023. 6. 16	約 97 m ²	記録保存 (個人住宅建築)
こおりやまいせき 郡山道跡 (第 330 次)	宮城県仙台市太白区 郡山五丁目	04104	01003	38° 13' 15"	140° 53' 35"	2023. 7. 7 ~ 2023. 7. 28	約 119 m ²	記録保存 (管路建設)
こおりやまいせき 郡山道跡 (第 331 次)	宮城県仙台市太白区 郡山五丁目	04104	01003	38° 13' 08"	140° 53' 28"	2023. 11. 6	約 2 m ²	記録保存 (深さ確認)
こおりやまいせき 郡山道跡 (第 332 次)	宮城県仙台市太白区 郡山三丁目	04104	01003	38° 13' 23"	140° 53' 43"	2023. 12. 1 ~ 2023. 12. 15	約 21 m ²	記録保存 (個人住宅建築)
こおりやまいせき 郡山道跡 (第 333 次)	宮城県仙台市太白区 郡山三丁目	04104	01003	38° 13' 23"	140° 53' 43"	2023. 12. 1 ~ 2023. 12. 15	約 15 m ²	記録保存 (個人住宅建築)
こおりやまいせき 陸奥国分寺跡 (第 33 次)	宮城県仙台市若林区 木ノ下三丁目	04103	01019	38° 15' 10"	140° 54' 11"	2023. 9. 21 ~ 2023. 12. 5	約 169 m ²	保存目的

所収道跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡山道跡	官衙跡 寺院跡 集落跡	飛鳥～平安	材木列跡、柱列跡、掘立柱建物跡、溝跡、土坑、竪穴住居跡、性格不明遺構	土師器、須恵器、瓦、土製品	
陸奥国分寺跡	寺院跡	奈良～平安	築地塼跡、溝跡、土坑、ピット	土師器、須恵器、瓦	

要約	郡山道跡 ・第 328 次調査ではⅡ期官衙の掘立柱建物跡等が検出された。1 区ではⅡ期官衙の中軸線を基準として配置される 2 棟の東西棟建物跡 (SB716・1490) の精査を実施した。また、2 棟の建物跡の間には一本柱列跡 (SA2652) が検出され、何らかの関連施設と考えられる。2 区では東西棟の廂付建物跡 (SB2584) の精査を実施した。その結果、東・西・南の三面で南が広くことが確認された。 ・第 329 次調査ではⅠ期官衙に関連する溝跡が検出された。溝跡はⅠ期官衙の東辺材木列跡の外側に平行するように延びており、区画施設等の機能が想定される。Ⅱ期官衙と関連する遺構は竪穴住居跡が 1 軒検出された。 ・第 332・333 次調査では方四町Ⅱ期官衙の東辺区画施設である材木列跡が検出された。 ・第 327・330・331 次調査では遺構・遺物は検出されなかった。 陸奥国分寺跡 ・第 33 次調査では築地塼跡、溝跡、土坑等が検出された。これら遺構は古代の陸奥国分寺跡の北辺区画施設の可能性があり、築地塼跡は東西方向に延び、上部構造は残存していないが、掘り込み地盤の痕跡が確認され、その北側には平行するようには溝跡が走る状況が確認された。また、これら区画施設より新しい区画溝と考えられる溝跡が 1 条検出された。
----	---

仙台市文化財調査報告書第516集

郡山遺跡 44

—令和5年度発掘調査概報—
郡山遺跡・陸奥国分寺跡

2024年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区上杉1丁目5-12
仙台市役所上杉分庁舎10階
文化財課 TEL. 022 (214) 8893

印刷 モリタ印刷株式会社
仙台市太白区郡山八丁目20-30
TEL. 022 (246) 0105 ㊞
